
ミルディア国戦記

竹中半兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルディア国戦記

【NZコード】

N8672W

【作者名】

竹中半兵衛

【あらすじ】

唯一神ゼメウスを信奉する大国ゼメキア教国が隣国ミルディアへの侵攻を決定した・・・

迎え撃つミルディア国・・・

王太子ルイ・アルトワは争いごとを好まないやさしい青年・・・
その性格ゆえに、國中の人間から『惰弱な王子』として笑い者にされなっていた。

しかし彼のそばにいる一握りの人間だけは知っていた。ルイは決し

て惰弱ではなく、卓越した能力の持ち主だということを。

今敵国の侵略に際し、大切な人を守るためにルイは惰弱者のベールを脱ぎ捨て戦いに身をゆだねることとなる・・・・

大陸の中でも巨大な版図を有する大国・・・

ゼメキア教国は、ゼネウスという唯一神を信奉する政教一致国家である。

国の統治を行うのは教皇イカロス4世、そして実質教皇の元で国家の政治を行っていたのは名門アークス家出自の大將軍カイン・アークスとその妹である衛將軍レオナ・アークスの二人である。

わずか28歳と26歳のこの兄妹は、見る見るうちに出世を遂げこの要職につくやいなや一気に版図を拡大し、その天才的な軍事手腕を世に知らしめた。

また内政においても比類なき才を見せ、ゼメキア教国はまさに隆盛の極みともいえる時代にあつた・・・

「・・・・・」

ゼメキア教国の中都ベルニアの王宮の執務室・・・

カイン・アーカスが内政報告を部下から受けている。

その知性をたたえた鋭い視線を書類から外さずカインは静かに部下の報告を聞き終えた。

「ごくろうだつたな、これで今年の冬の食糧備蓄は問題あるまい」「はつ、閣下の政策のおかげです」

「・・・・・・・」

カインは執務室の入り口に視線を投げた。

慌しい足音とともに部屋の扉が開けられた。

「その様子だと命令が下つたようだな・・・・・レオナ」

カインは入つてきた妹レオナ・アークスを見やつていった。

「ええ・・・・ミルディア侵攻の命令が下つたわ」

レオナ・アークスは美しい金髪をかきあげ興奮気味に言った。

「ゼネウスの神から神託が下つた・・・異教徒の国、ミルディアを滅ぼせと」

「・・・・・ミルディア・・・・・」

カインは静かにつぶやいた。

「・・・・・これで冬の食糧備蓄を一気に食い潰すわけか・・・・・」

カインの顔に自嘲的な笑みが浮かんだ。

「ミルディアには天魔王と呼ばれる7人の師団長あり、その下にも精銳があまたひしめいている。簡単に滅ぼせと信託が下つたが、実際はそんなに楽な仕事ではない」

「でも神託よ？教皇様が言つてたわ。私たちにはゼメウスの神のご加護があると」

「・・・・・」

カインは妹の顔を見やつて少しため息をついた。同じ兄妹でもカインとレオナのゼメウス教への信奉度合いは全く違う。カインの本質は徹底した現実主義者だった。

今の国力でミルディアに全面戦争を挑んだところで、勝算は五分五分。

仮に制圧できたとしても戦争の痛手から回復するには数年かかるだろう・・・・・

「教皇様！」

レオナがはつとして床にひざまづいた。カインもゆっくりとレオナに習つ。

部屋に入ってきたのは教皇イカロス4世だった。

「カインよ！話は聞いたか？」

イカロスが甲高い声で言った。

「・・・・は・・・」

カインは苦々しく頷いた。教皇イカロスは驚くほど小男である。その小男が最高位の紫の法衣を着て自分を見下ろしている……。カインはため息が出る思いだった。

「神託がくだつたとか・・・・・」

「そうじゃ！ 西の異教徒の国ミルディアは呪われてある！呪われた異教徒に死の救済を与えるとのゼメウス神よりの神託じやー！」

「しかしながら・・・・・」

カインは静かにイカロスを見上げた。

「今年の冬は厳しいものになると予想され、今からの食糧備蓄が必須・・・ そんな中での遠征は・・・・」

「カイン！ ！」

甲高い声がカインをわえぎつた。となりで跪いているレオナの肩がびくりと震えた。

「何度も言わせるな。これは神託じや。食糧のことは心配ない。神はわれらを見捨てたりはせぬ」

「・・・・・・」

カインは小さくため息をついた。

この男に何を言っても無駄だらう。ミルディアの全土制圧を目指さず一部版図を制圧すれば納得するだらう・・・・・

こつじでゼメキア教国のミルディアへの侵攻が決まった・・・・・

第1天魔王

ミルディア王国 · · ·

大陸の穀倉地帯を有する列強の中でもゼメキア教国に匹敵する国力を有する国である。

『英王』と称えられる国王リチャード・アルトワ1世のもと天魔王と呼ばれる7人の師団長たちがその下に属している。国王リチャードが自ら見出し取り立てたこの天魔王たちの活躍によつてミルディア王国はリチャードの代でその版図を一気に広げ、ゼメキア教国に匹敵するまでになった。

今国王リチャードの前にその天魔王の一人シャロン・ハイラルが跪いている。

第5天魔軍の師団長である彼女は幼少のころよりリチャードの手元で帝王学を学んだいわゆる教え子の一人である。

弱冠18歳で第5天魔王に取り立てられて3年、彼女の立て続けにあげた戦功は枚挙に暇がない。

「いよいよゼメキアが動き始めた様子」

シャロンがそのよく澄み渡る鈴のような声で言った。

「うむ·····戦となるな····」

リチャードは苦々しく言った。彼がミルディアをここまでの大國にした手腕は何も武力だけではない。

その卓越した外交能力で、彼は常にミルディアの立場を守り続けてきた。

ただゼメキア教国のみが一切の外交的な交渉をはねつけ続け、ついに開戦となりそうなのだ。

リチャードがため息をつくのも無理はない……

「シャロン」

「はい……」

「この戦、あやつの初陣にしてひと悶ひ

「…………！」

シャロンの端正な口元が苦笑を浮かべた。

「第6天魔軍につけようと考えておる」

「キーナも災難ですね……」

シャロンの皮肉っぽい言葉にリチャードも思わずため息をついた。

「散々逃げ続けてきたが、あやつもこつまでも戦経験がないではす
まされぬ」

「そうですね……」

「お前には苦労をかける。あやつにじつかりしてもらいたくて婚約
者などにしてしまったが……」

「…………」心配なく

シャロンは肩をすくめて見せた。

「私を孤児院より救い出してくだせりにからむの方、リチャード様
には並々ならぬご恩があります。」

「恩か……あやつ……ルイのことを支えてやってくれ……
頼む」

そういうリチャードの顔は、魔王のものではなく一人の父親の顔だ
った。

「ルイは今どちらに……？」

「ふん……おそらくは中庭で油を売つておるわ……」

リチャードはにやりと笑った。

「好きにいたせ。引きずつても軍議につれてまいれ

「かしこまりました」

シャロンも苦笑すると立ち上がった。

ミルティアの王都ゴンドール・・・

王城の中央に広がる中庭で一人の青年が寝そべつたまま静かに寝息を立てている。

「ルイ様・・・」

そばには10歳くらいの少女が座っている。

「そろそろ軍議のお時間では・・・？」

「有難う、マリア・・・」

青年は目を開きにつこりと笑った。女性のように端正に整った顔立ち、優しげな瞳が印象的なその青年は立ち上ると大きく伸びをした。

「面倒だな・・・軍議なんて」

「・・・」

マリアと呼ばれた少女はクスリと笑った。

一見普通のどこにでもいそうな少女だが、唯一目を引くのはその瞳の色だ。

まるで血のような真っ赤な瞳をしている。

「戦いをなさるのですね・・・」

「仕方ないだろうね。父上もいつまでも僕が出陣しないのでは格好がつかないもの」

青年はすっと目を細めた。

「ルイ！――」

よく通る透き通った声が青年を呼んだ。

「やあ・・・・・」

青年の顔にうれしそうな笑顔が浮かんだ。

「軍議が始まるわよ？何をしてるの！」

シャロンは青年を引っ張り起こした。

「まったく・・・・・・」

シャロンは自らの婚約者、王太子ルイ・アルトワをしげしげと眺め

た。

・・・
容姿ときたら申し分ないのだが、その惰弱さゆえに國中の笑い者・・

תְּהִלָּה וְעַמְּדָה | טוֹבָה וְזָרָה

…その情弱者と結婚するのだから私も物好きね…

「もうゼメキア教国軍は国境を越えた？」

「ええ・・・」

「そりか」

ルイの瞳に悲しみが浮かんだ。

「ああ……行くわよ？ あなた

ね
?
」

シロノは反肉ノは

シヤロンは皮肉つぼぐるイを振り返つた。

第六屆二月

第6天魔王

ミルディア国軍8万は国境付近に進撃するゼネキア教国軍9万を迎撃するため、国境に向けて進発した。

先鋒をつとめるのは第6天魔軍団長キーナ・カーンである。ひとりわ田を引くのは彼女のミルディア人には珍しい浅黒い肌・・・

それもそのはず。

ゼメキア教国の侵攻にあい滅ぼされた北方の騎馬民族の数少ない生き残りが彼女である。

リチャードは難を逃れてきた彼女とその部族の生き残りを受け入れ、その騎馬技術を取り入れる先駆けとした。

そのためキーナが率いる第6天魔軍は彼女の出自である騎馬部族の特徴をそのままに残している。通常の騎兵と違い、身軽な鎧を身にまとい『騎射技術』に格段に優れている。

つまり騎兵と弓兵両方の特徴を兼ね備えている。

その軍団長に就任したのが22歳、そして今日に至る3年間第6天魔軍は押しも押されぬミルディアの主力部隊となっている。

そのキーナだが今朝は不機嫌そのものだった。

もうすぐ国境のサラミス平原に到着し、陣をかまえる準備を行うわけだが、心は晴れないままだった。

「なんでうちがお守りまでやらなあかんのや・・・」

キーナはいらだたしくつぶやいた。

彼女の言葉には出自ゆえのなまりがまじるが彼女は気にも留めない。

「そうですね・・・足手まといは困りますな」

側近が追従するのを鼻で笑うとキーナは軍を止め、布陣の命令を下した。

すぐリチャード率いる中軍がくる。いろいろしている暇もない・・

・・

その頃リチャード率いる中軍7万も国境付近に差し掛かっていた。

「坊ちゃん！」

馬をのんびりと進めるルイに一人の将軍が馬を寄せた。

「坊ちゃんはやめてくれよ、ウォレス・・・」

ルイは苦笑して振り返った。

第3天魔王ウォレス・ハート・・・・彼は幼い頃のルイの養育係をつとめ、ルイに対しての敬意を唯一失わずにいるミルティアでは珍しい部類の人間だ。

戦に出れば『魔人』と恐れられるほどの武勇を発揮する彼も、ルイと話す時はまるで自分の息子と話すかのように相好を崩す。

「いよいよ初陣ですが、このウォレス嬉しうござりますぞ。」

「面倒だけどね・・・・」

ルイは肩をすくめて見せた。

「キーナさんの後ろに隠れておくよ」

「ははは・・・それが安全ですな」

ウォレスは大きく笑つた。

「キーナ殿は気難しい方ですが、根はよい方です。ご心配なく」

「ああ・・・・」

ルイは前方に見えてきた布陣を完了した第6天魔軍を見て目を細めた。

「『』挨拶して『』ようかな」

そういうとルイは馬腹を蹴つて一人走り出した。

キーナの天幕をルイが訪れた時、キーナは一人でいた。

彼女の出陣の儀式である部族の戦闘の化粧である。

右目の周りに描かれた黒い模様・・・彼女自身のいつもの習慣だ。

「なんや・・・？」

キーナは自分の右目に田を奪われているルイを見てせせら笑った。
「そんなに物珍しいんか？王子にも化粧してあげましょうか？」

「いりません・・・」

即答したルイにキーナは少し驚いた。

「失った同胞を想つてあなたがするその化粧・・・僕なんかがする資格はありません」

「・・・」

自分の想いをそのまま表現したようなルイの言葉にキーナはまじまじとルイを見つめた。

「王子はこれが始めての戦やそつやね

「はい」

「怖いか？」

キーナの問いかにルイは肩をすくめて見せた。

「ええ、まあ・・・ただあなたの軍にいるので心配はないと思つてますよ」

「ふん・・・他力本願か・・・」

キーナは毒づきながらも、ルイの落ち着きに内心驚いていた。

＜・・・まあ足手まといには変わりないけどな・・・＞

キーナはため息をつきルイを促し軍議に向かった・・・

開戦

軍議の席には上座にリチャード、そしてほとんどの天魔王たちがすでに一堂に会していた。

「遅れました・・・」

キーナがルイをせきたてながら入ってきて最後に着席するのを見てリチャードが重々しく口を開いた。

「これより軍議をはじめる」

リチャードはそう言うとウォレスを見やつた。

ウォレスは頷くと戦況を説明し始めた。

「敵軍はアーツ兄妹率いる9万・・・直属の兵がほとんどで精兵の集まりが今回出撃してきております。また第7天魔軍からの報告ですと、教皇イカロス率いる教皇直属の騎士団約3万が先ほど合流したとのこと」

「教皇の親征つてことか・・・」

シャロンがつぶやいた。この事態が意味するのは今回のゼネギア教国の侵略は様子見などではなく明らかにミルティアの征圧を意図していると言つことだ。

「ルイ・・・」

リチャードが下座に座るルイを見やつた。

「どう思ひ」

「・・・！」

軍議にいたすべての天魔王たちが意外な顔をした。初陣の・・・しかも憚弱な王子として有名なルイの意見をリチャードが一番に尋ねたことに心外な顔をした。

「恐れながら・・・」

その感情を露骨に吐露したのは第2天魔王カイゼル・レインフォートだった。シャロンと同じ孤児院から同じ時期にリチャードに見出された彼は、シャロンをも凌ぐ軍略と武勇を持つミルディア随一の名将である。

「王子はこのたびは初陣……意見をお聞きになられても時間の無駄かと」

「カイゼル！ 言葉を慎め！」

ウォレスがカイゼルを忌々しげににらみつけた。

「…………この平原はだだっ広い荒野……」

キーナが地図を見ながら口を挟んだ。こんなくだらないことで軍議の方針がそれることが彼女が最も嫌うことだった。

「まずは第6天魔軍が一当たりし敵の出方を見るといふことでええかと思いますが？」

「うむ……」

リチャードは重々しく頷いた。

「ただし……敵は比類なき名将アークス兄妹だ。深追いは禁物ぞ？ 念のため第4天魔軍を後詰につける」

「ゴロアですか……」

キーナの顔に苦笑いが浮かんだ。

第4天魔軍ゴロア・ドラムンドは猪突猛進と言つ言葉がぴったり当てはまる将である。一騎打ちとなつた場合の武勇はカイゼルにも引けをとらないが、作戦通りことを述べない短気な一面がありキーナとしては後詰が第4天魔軍であることは何の救いにもならなかつた。

「何か不満か？ なんなら俺が先鋒でもいいんだぞ？」

雲をつくような巨体をゆすりゴロアがあざ笑つようにキーナを見た。

「…………」

キーナはゴロアの挑発を無視して一礼すると立ち上がり天幕を行つた。そのあとをルイがあわてて追う。

「…………」

シャロンは心配げにため息をついた。リチャードと言う強力な要が

なければ天魔王たちはこんなものだ・・・

出撃の合図の角笛が響き渡った。

「王子」

キーナがルイを振り返った。

「怖ければ中軍に下がつてもええんですよ?」

「大丈夫ですよ。」心配なく

ルイの場違いともいえるにつこりとした笑顔にキーナは毒を抜かれたような気になった。

「まあえわ。とりあえずうちから離れんように」

キーナは彼女の武器である大きく湾曲した曲刀を抜き放ち叫んだ。

「突撃!!!」

大地を揺るがし第6天魔軍が突撃を開始した。

鋭い錐の陣形をとつた第6天魔軍に対し、ゼメキア教国軍の前衛がさつと開き迎撃の体勢をとるのがわかる。

500歩の距離に迫つた時、第6天魔軍の騎兵たちがなんと両手を手綱から外し鎧のみで馬を操りながら弓に矢をつがえた。

「放て!!!」

キーナの号令のもと、第6天魔軍から放たれた矢が雨となってゼメキア教国軍前衛に降り注いだ。

『死の雨』と呼ばれるこの第6天魔軍の騎射攻撃は騎兵が敵に接触するまで数回繰り返される。

死の雨を浴び算を乱したゼメキア教国軍に突き刺さるように第6天魔軍が切り込んだ。

先頭を走るキーナは曲刀を舞わしぬくとゼメキア騎兵をその餌食とした。

「・・・・・」

ルイは辺りを見回した。

ゼメキア教国軍前衛はすでにキーナの軍に蹴散らされ算を乱して退却し始めている。

キーナの第6天魔軍がそれに追い討ちをかけようとしている。

「キーナさん！」

ルイが叫びキーナに馬を寄せた。

「敵が脆すぎます。戦意がなさすぎる・・・」

「確かに・・・」

キーナはあたりに目をやつた。

後詰のはずのゴロア率いる第4天魔軍の動きが悪く微妙な間隙が生じている。

見る間にそこにゼメキア教国の一軍が割り込もうとしているのが分かる。

「やつー、ゴロアのやつー！」

キーナは舌打ちすると退却命令を下そうと辺りを見回した。
包囲網を突き崩すのにうつてつけの歩兵軍団がやけに目だつて見えた。

「敵歩兵軍団にむけて突撃・・・！」

号令を下そうとしたその時、ゼメキア教国軍の投石がキーナの頭部に命中した。

「あつ・・・」

これにはたまらずキーナは馬上で氣を失った。

「キーナさん・・・」

ルイがあわててキーナを自分の馬に引き寄せた。

「ルイ様・・・」命令を！

キーナの側近が慌てふためいて叫んだ。

「・・・・・」

ルイはあたりを冷静に見回している。

「ルイ様！」

「逃げちゃおう・・・」

ルイはにっこりと笑つた。

「みんなに伝えるんだ。太陽の方向に向かつて突撃つてね」「・・・・・はつ！」

「・・・・・」

戦況を遠望していたカイン・アーツは苦笑いした。

包囲した第6天魔軍が襲い掛かったのは、意図していた歩兵軍団ではなく教皇直属の重装槍兵团だった。重い装備に身を固めた槍兵たちは疾風のように包囲を突破する第6天魔軍に対してなすすべもなかつた。

「教皇の余計な合流がなければ・・・・・」

カインは舌打ちした。

「それでもキーナ・カーンにこれほどの冷静な判断力があるとは・・・歩兵軍団といつえさに食いつかなかつたとはな・・・」

カインは知らない。

この包囲網突破がミルディアでもっとも役に立たないと思われていた青年によつてなされたことを。

こうして緒戦は双方痛みわけという形で幕を下ろすこととなつた・・

「…………」

キーナは気がついた。

あわてて体を起こすとそこにはミルティア軍本営だつた。

「お気がつかれましたか！」

「退却・・・・・できたんか・・・・・」

キーナの言葉に側近は頷いた。

「ルイ様の指示で」

「王子の・・・・！」

キーナは目を見開いた。

「ルイ様の太陽に向かつて退却と言つ指示の元、我々はゼメキア教
国軍の包囲を突破しました」

「太陽の・・・・」

く・・・・そうか・・・・く

もしもあの時敵歩兵団に向かつて突撃していたら・・・・・

キーナはまだ投石をくらつてずきずきと痛む頭を抑えた。

「王子は・・・・？」

「さあ・・・・退却が完了するどこのかに行かれましたが」

「・・・・・・・・」

キーナは立ち上がるとひらりと馬にまたがつた。

ほどなくキーナはルイを発見した。

本営から少し離れたところの小さな天幕でのんびりルイは本を読ん

でいた。

傍らには赤目の少女マリアが静かに座っている。

「大丈夫ですか？」

ルイは入ってきたキーナに気がつくとこりと笑った。

「・・・あ・・・うん・・・」

キーナはあわてて頷いた。

「た・・・退却の指揮とつてくれたって・・・？」

「ああ、あれですか？」

ルイは肩をすくめて笑った。

「当てずっぽうで太陽に向かつて逃げろって言つたらそれが正解だつたみたいで・・・」

「当てずっぽう・・・」

キーナは首を振つた。

「王子、うちはいろいろと退却時の様子を聞いたんや・・・あれは偶然の指示なんかやないことくらいうちはわかる」

「・・・・・・」

ルイは静かにキーナを見やつた。

その静かな優しげな瞳にキーナは思わず目をそらした。

「な・・・なんで今回のこと手柄やつていわないんです? 口止めしはつたらしいないですか・・・」

キーナは思わず声が上ずつているのを感じた。

「あれだけみんなに馬鹿にされてるのに・・・見返したくないんですか!? 私やつて王子のこと・・・」

「キーナさん」

ルイの静かな声がキーナの言葉をやさしくさえぎった。

「誰の手柄とか、誰のおかげとか・・・」

ルイはにっこりと笑つて言つた。

「そんなのどうでもいいじゃないですか。」

「どうでも・・・・・」

「戦争なんかもともと意味のないものなんです……」

ルイは、すっと手を細めていった。

そこに一気に現れた知性的な雰囲気にキーナは言葉を失った。

「大事なのは自分の国の人たちができる限り死なずにすむこと。こんなくだらない戦争で」

「…………王子…………」

「だから僕は別に英雄なんかにならなくてもいいんです。惰弱でどうしようもない王子のままで……」

ルイの笑顔を見てキーナは胸を打たれた。

なんて邪心のない笑顔…………

「王子…………」

「はい？」

「惚れたで…………！」

「は…………？」

あっけにとられたルイをキーナは思い切り抱きしめた。

「あ…………ちょっと…………キーナさん…………！」

顔を真っ赤にして逃げようとするルイにキーナは声を立てて笑つた。
「これからはうちとうちの第6天魔軍は王子の味方や。何でも役に立てることがあつたらいうてや」

そういうとキーナはルイににっこりと笑いかけた。

その屈託のない笑顔にルイも笑顔でこたえた。

「はい…………！」

「あ…………ぼちぼち軍議が始まるで…………いこつか…………！」

キーナはルイの手をつかむと引きずるように歩き出した。

今まで彼女がルイに感じていたイライラはかけらもなくなつており、
そこに芽生えた想いにキーナ自身まだ戸惑いつつあった……

第7天魔王

「集まつたようだな」

リチャードが重々しく口を開いた。

「キーナ・・・・・」

「はつ・・・・・！」

「ゼメキア軍と一当たりしたのはそなただ・・・・・どうだつた？」

「は・・・・・・・」

キーナは言葉に詰まつた。

「・・・・・言わないと・・・・・退却の成功は王子のおかげやつて・・・・・意を決して顔を上げたキーナの手をルイが静かに押さえた。

「・・・・・！」

キーナは小さくため息をついた。

「おそらくは最初の一当たりは陽動。彼らの本意は先鋒の我らを包囲殲滅し先制打撃をあたえたかったものと思われます」

「さすがはキーナ・・・・・ようあの包囲から脱出したものよ」

ウォレスの言葉にキーナはいたたまれなくなつて俯いた。

「ふん・・・・・はじめの猪突猛進がなければそもそも包囲すらされておらぬわ」

ゴロアが悪意をこめてつぶやいた。思わず言ひ返そうとしたキーナよりも先に口を開いたのはルイだつた。

「ゴロアさん・・・・あなたの後詰にも問題があつたように思ひますが、

けど

「！！」

「第4天魔軍は本来第6天魔軍を追走しているはずがゼメキア軍が横入りできるくらいに間隔があいてた」

ルイはにっこりと笑つて言った。

「戦場つて僕はよくわかりませんが、やむにやまれぬ理由があつたんですね？」

「う・・・・うむ・・・・」

黙り込んだゴロアをよそにルイは他の天魔王たちをみやつた。
「第6天魔軍は無事に脱出した。敵の狙いもわかつた。収穫は大きいですね？」

「そのとおりだ・・・ルイ」

リチャードが静かに言った。

「ゴロア・・・・よいな？」

「は・・・・ははっ！…！」

「今後も引き続き先鋒は第6天魔軍でいく、キーナもそのつもりでな」

「はっ！」

リチャードの温かい言葉にキーナは感激してうなづいた。

「それにしても・・・・

リチャードは低くつぶやいた。

戦況は不利そのものだ。兵力差があるだけにこちらから攻勢にでられないのが痛かった。

その日の夜・・・

ルイは一人で天幕で本を読んでいる。

「ルイ・・・！」

天幕に訪れたのはシャロンだった。

「大丈夫だった！？怪我はしていないよね？」

入ってくるなりシャロンはルイの体を調べた。

「いきなり敵に包囲されるだなんて・・・」

「大丈夫だよ。キーナさんがいたから僕は安全だつたし」
ルイは肩をすくめて見せた。

「嬉しいな、心配してくれたのかい？シャロン」

「な・・・

シャロンはあわてて立ちあがつた。

「べ・・・別に心配なんてしていないわ。あなたはこの国の王子なんだから何があると困るの」

「ふうん・・・」

ルイはくすりと笑つた。

「ねえルイ・・・」

「ん?」

「あなたが退却の指揮をとつたつていう噂が流れてるんだけど・・・

「シャロンの瞳がルイの目をまっすぐに見つめた。

「キーナは投石で氣絶していてあなたがかわりに退却の指揮を執つたつて・・・・

「シャロン」

ルイは静かにシャロンの言葉をさえぎつた。

「ただの噂だよ。戦場にそんな噂つてつきものなんだね。びっくりしたよ・・・・」

ルイの屈託のない笑顔を見てシャロンはため息をついた。

「そうね、そうよね・・・・」

シャロンは小さくため息をつくとルイの天幕をあとにした。

「・・・・・よかつたのですか?」

シャロンの出て行つた天幕・・・

一人でいるはずのルイに小さな声がささやいた。

「ああ・・・戦場での手柄なんか意味もないから」

ルイは驚く様子もなく天幕の隅の闇に向かつて話しかけた。

「それより・・・どうだつた?」

「ルイ様の見られたとおり輜重隊はアーケス兄妹の軍と教皇直属部隊は別々に存在しています。」

「・・・・・

「しかも教皇直属部隊の輜重隊はアークス兄妹の軍を避けるように迂回して兵糧を運んでいます」

「そつか・・・やつぱりね。たぶん兵糧の中身も直属部隊は違うってことか・・・」

ルイの顔に笑みが浮かんだ。

「ご苦労様・・・・・マリア」

ルイの言葉に闇の中から浮き出るよひに赤い瞳の少女、マリアが現れた。

第7天魔王、マリア・レイ・・・・・

彼女の出自はなんとゼメキア教国である。

生まれてから教団に暗殺者として育てられたが、ゼメキア教で『不吉のしるし』とされる赤い瞳をもつ彼女は虐げられ続け、ついに教皇イカロスから国外追放となつた身である。

しかしその後ウォレスの推挙で諜報部隊第7天魔軍の軍団長にとりたてられた。

「悪いけどこのこと、父上に知らせててくれ。父上ならこれを戦況の打開に使うはず・・・・

「ルイ様があつしゃればいいのに・・・・

「マリア・・・・

ルイはそつとマリアの頭に手をのせて微笑んだ。

「私は悔しいです。カイゼル様なんかいつもルイ様を馬鹿にして・・・

「優しいねマリアは」

「・・・・・・・・

マリアはため息をついた。

「ルイ様のご命令なら仕方ありません。リチャード様にお知らせします・・・・

「頼むよ」

「マコアは音もなく闇の中に消えていった。

「終わらせなきや・・・一刻も早く・・・」

そうつぶやいたルイの瞳は憂いに満ちていた・・・

策略

ロンウナーといつ男がいる・・・

ゼネキア教国の中でも教皇の信頼の厚い直属軍の一員である。今彼は一軍を率い、教皇の本営に向けて進軍中である。

「もう少しだ！氣を緩めるな！」

部下に命令しつつロンウナーはもう何度目にならぬため息をついた。
「・・・まったく・・・大将軍の部隊に気づかれぬように兵糧を運べなどと・・・」

彼は自らが率いる輜重隊を見やつた。

およそ戦地の糧食とは似つかわしくない豪華な食べ物や飲み物・・・

・
それらは極秘扱いで教皇の直属軍にのみ届けられる。

「・・・同じ神の兵であるはずなのに・・・」
ロンウナーは頭にこびりついて離れない疑問をかぶりをふつて追いついた。

考へても仕方ない。

教皇の言つことに従わなければこの国にいることはできない。

「・・・・・！」

突然ロンウナーは右手を上げて進軍を止めた。

彼の歴戦の將としての感覚が異変を感じ取つた。

「敵襲だ！迎撃用意！！」

彼が叫ぶと同時に彼の部隊に矢の雨が降り注いだ。

「ニ・・・・これは！」

ロンウローは次々と正確な斉射で倒れていく味方の兵をみて愕然とした。

↖・・・・「これはミルディアの第6天魔軍の死の雨……」

待ち伏せを悟つたロンウローの兵に、ミルディアの第6天魔軍が襲い掛かつた。

「くつ！」

一瞬にして不利を悟つたロンウローは傍らの兵に叫んだ。

「大將軍の陣にかけこみ援軍を要請しろ！」

「し・・・しかし！」

「この有事に些細なことは気にするなー行け！」

「はっ！」

ロンウローは伝令兵を逃がすとミルディア軍を迎撃に向かつた。

輪重隊の警護兵約五千に対しミルディアの第6天魔軍も伏兵行動だつたためほぼ同数。

しかし不意をついた兵とつかれた兵との士氣の差は歴然としていた。

↖・・・かくなる上は主将を討つしか・・・

ロンウローは血眼になつて敵兵の主将であるキーナをさがした。

と・・・そのロンウローの前に複数の警護兵に守られたミルディアの将軍らしき青年が現れた。

これはルイだつたのだが、ロンウローはルイのことをキーナの副将と勘違いした。

無理はない、ルイ自身がそれほど他国に知られていなかつたのだから・・・

無言で襲い掛かつてきたロンウローに、ルイを警護していた兵たちはあわてて立ちふさがろうとした。

だがその勢いは凄まじく、あつとこゝう間に数名のミルティア兵がロ

ンウェーの槍の餌食となつた。

「・・・・・！」

警護兵がひるんだ瞬間を見逃さず、ロンウェーはルイに襲い掛かつた。

キーン・・・・！

怪鳥のような耳に響く音を立てロンウェーの槍の穂先部分が宙高く舞つた。

「・・・・・！？」

まつぶたつになつた槍を呆然と見つめるロンウェーを第6天魔軍の兵たちがよつてたかつて馬から引き摺り下ろした。

「殺さないで・・・」

ルイの声に兵たちはおとなしく従い、ロンウェーに縄をかけた。
<・・・見えなかつた・・・斬撃がまつたく・・・・・>

ロンウェーは呆然としたまま捕虜となつた。

「すごいやん！王子めちゃめちゃ速いやん！」

キーナが目を丸くして言つた。

「・・・・ええ・・・まあ」

「ええまあじゃないで！？カイゼルなんかより強いやん、王子！」

「・・・・・好きじゃないんです」

「え？」

「人を殺す力を褒められるのって・・・」

ルイは肩をすくめて困つたように笑うと周りを見やつた。

「大勢は決しましたね」

「そうやね・・・・糧食をぶんどつて帰るつか」

「いえ・・・・・」

ルイはゆつくりかぶりをふつた。

「「」のまま・・・

「なんで?「」の糧食をおいていくんか?」

「「」の糧食を大將軍の兵に見せるんです。そつする「」とで内部亀裂が起ころる・・・

「なるほどな・・・」

キーナはルイの冷静な判断に舌を巻いた。

確かにこの贅沢極まりない糧食を見た大將軍の兵の間には教皇直属軍への不満が一気に高まることだろう。特にここは戦地だ。食の差別はもつともあつてはならないこと・・・

もともとこの攻撃を進言したのは第7天魔王マリアだと聞いているが、キーナは確信した。

ルイだ・・・この青年の冷静な判断・・・

この襲撃を考えた人間しかありえない。

「わからん人やね・・・」

キーナはルイを見てため息をついた。この人には欲がないのだろうか・・・

「あとは盛大に火の手を揚げましょ。糧食の一部を豪快に燃やして大將軍の兵からも見えるように」

「うん・・・・」

キーナはくすりと笑うとルイの指示に頷いた。

いつの間にか第6天魔王の自分が、國中が馬鹿にする王子の命令を素直に聞いている・・・
悪い気分ではない自分がキーナは少しおかしかった・・・

想い

もぐもぐと立ち込める煙の中、カイン・アークスは苦々しげに打ち捨てられた糧食の山を見やつた。

「これが兵糧か・・・」

カインは小さくため息をついた。

「・・・ぐだらぬことをしてくれたものよ・・・」

教皇直属軍だけが豪華な兵糧を支給されていたことを全員が知れば一気に内部亀裂が起つる。

「誰にせよ味な真似をする・・・」

カインは輜重隊の生き残りの兵を探させた。

ほどなく生き残った一人の兵がカインの前に引き据えられた。

カイン直属の兵たちはすでに殺氣立つてゐるため、輜重隊の生き残りの兵は蒼白になつてぶるぶると震えている。

「おびえるな。お前は同胞だ。殺しはしない・・・」

カインの言葉に生き残りの兵は震えながら頷いた。

「何があつた?」

「は・・・はい・・・私たちは本国から教皇様の命令で糧食を運んできました」

「それで敵兵の襲撃にあつたのだな?」

「はい、ミルディア軍の第6天魔軍でした・・・あれは・・・」

「そうか・・・またキーナ・カーンか・・・」

カインはため息をついた。

「それで?お前の主将はどうした?キーナに殺されたのか?」

「いえ・・・ロンウェー様は副将と思しき若い将軍と一緒に打ちをされ生け捕られました」

「若い将軍?あのロンウェーを生け捕りにしたのか?」

カインは少し驚いて言つた。

・ ロンウォーの武勇は簡単に生け捕られるようなものではないはず・

・ 「何者かはわかりませんが、一瞬でロンウォー様の槍を両断したあの剣をばきは只者では・・・」

「・・・・・・」

カインは首をかしげた。

第2天魔王のカイゼルを思い浮かべたが、すぐにそれはありえないことだとわかった。

カイゼルであれば第6天魔軍の指揮下にいるはずがないし、なによりこの兵にもわからないはずではない。

「何者だ・・・・」

カインはいぶかしげにつぶやいた・・・

同じころ・・・

勝利に士氣の上がるミルティア軍の天幕で・・・

ルイとキーナは天幕から少し離れた小高い丘にいた。

「なんでや? ロンウォーを生け捕つたのは王子なんやで?」

「はい・・・・・」

「それをうちの手柄にしようやなんて・・・・」

キーナは苛立たしげに髪をかきむしった。

「今度ばかりはそういうかんよ? たくさんの兵が見てたんや!」

「・・・・・ですよね・・・・困ったなあ・・・・」

ルイはため息をついた。

「僕を守ろうしてくれた護衛の兵たちが殺されたから仕方がなかつたんです」

「王子・・・・・!」

キーナはルイの肩をつかんだ。

「ずっと・・・・馬鹿にされてたんですよ? 見返したりうと思わん

のですか！？」

「僕は・・・・・」

ルイは静かに微笑んだ。

「ただ・・・・・自分のそばにいる人たちを守りたい。ただそれだけです・・・・・」

「王子・・・・・・・」

「この戦で死ぬこの国の兵たちを少しでも減らせられたら・・・・・」

ルイは悲しげにつぶやいた。

そこにはあの暗愚な雰囲気はなく、彼の全身に研ぎ澄まされた知性の光が満ちていて、それをキーナは肌で感じ取った。

「王子は優しいね・・・・・」

キーナはそっとルイの肩に手を置いた。

「そんな王子、うちは好きやで・・・・・？」

「え・・・・・！」

一瞬で赤面したルイを見てキーナは朗らかに笑つた。

「さあ・・・・・捕虜のロンウェーの処遇を決める軍議があるんで？いくで？」

そういうとキーナはルイを引っ張つて歩き出した。

天幕に居並ぶ天魔王たちの中央にロンウェーが引き据えられている。入ってきたキーナとルイを見てロンウェーがいきなり叫んだ。

「お主・・・・・何者だ？」

「・・・・・・・・・」

一瞬で天魔王たちが静まり返つた。

ロンウェーの視線の先には困った顔のルイがいた。

「あの剣さばき・・・・俺はあれほど速い剣を見たことがない・・・・」

「そ・・・・・それほどでもないですよ?」

ルイのどもつた返事にキーナがくすりと笑つた。

だが他の天魔王たちはわけがわからず畠然としている。

「軍議を始める・・・・・ロンウェー殿には発言を慎まるよつ

ウォレスが場を静め、ルイは安堵のため息をついた。

「リチャード様は遅れて見えられる。われらだけで先に軍議を始めよとの仰せだ。」

ウォレスはそういうと全員を見やつた。

「まずはこれなる捕虜ロンウェー将軍の処遇についてだが……」

「決まつておる！見せしめに首をはねてやるのだ！」

第4天魔王「ロアが叫んだ。

「無法な侵略者がどうなるかをやつらに見せ付けてやるのだ！」

「俺も賛成だ……それによってわが軍の士氣も上がるといつもの」

カイゼルも同調したことで、場の雰囲気が殺伐としたものに変わり始めた。

「シャロン殿は……？」

ウォレスの言葉にシャロンは頷いた。

「私も同感ね……兵の士氣をあげるには上策だわ……」

「キーナは？」

「うちは……」

キーナは賛成……と言いかけて思いとどまつた。

ルイは……？彼女の言葉をとめたのはその想いだつた。

「……」

ルイに視線を泳がせたキーナを見てシャロンが首をかしげた。

「僕は反対です……」

ルイが沈黙を破つた。

「誰もあなたの意見など……」

言葉をかぶせようとしたカイゼルの目をルイは真っ向から見据えた。

「ここでこの人を殺したら僕たちも同じだと思わないのかい？」

「……？」

「この人はこのまま解放したい……」

ルイの言葉に処刑派の天魔王たちが一気に反対の言葉をまくしたてた。

シャロンを除いて・・・

「キーナさん・・・」

困ったように自分を見るルイにキーナはため息をついた。

「こいつは生き証人なんや・・・！」

キーナの声は戦場でもその獨特な響きゆえによく届く。その声でキーナが叫んだため天魔王たちは一気に静まり返った。

キーナはロンウェーが運んでいた糧食が教皇直属兵用の豪華なものだつたこと、それを大將軍の部隊は知らなかつたこと。

そして糧食を奪わずにあえておいて来たこと、すべてを話した。

「要するにあえて大將軍の陣営に返すことで内部瓦解を狙うということか・・・」

ウォレスが頷きながら言った。

「大体考えは出揃つたようだな・・・」

リチャードの声に天魔王たちはいっせいに跪いた。

「ルイとキーナの意見に従い、捕虜は解放する。手出しは無用だ・・・よいな？」

リチャードの言葉が重々しく天魔王たちの上に響いた・・・

「・・・・・」

解放されて戻つていくロンウェーの姿を小高い丘からルイが静かに見守つている。

「ルイ・・・・」

シャロンがルイの後ろから声をかけた。

「やあ・・・シャロン」

ルイがにっこりと笑つて振り向くが、シャロンの表情は硬かつた。

「ねえ・・・どうして今まで黙つてたの?」

「なにを・・・?」

「あなたは剣も使えたし、軍略だつて長けていたのに・・・」

「・・・・・」

「それを言つてくれてれば・・・」

「言つてくれてれば・・・・何?」

ルイの言葉にシャロンははつとした。

ルイの瞳に浮かんでいたのは悲しみだった。

「剣を使えても使えなくとも・・・兵を動かせても動かせなくて

も・・・・

ルイは悲しげに俯いた。

「僕は僕だよ・・・・」

そういうとルイはシャロンを残して去つていった。

「あ・・・・・」

シャロンは小さくため息をついた。

<・・・・何を言いたかったんだろう私・・・・>

シャロンは遠くゼメキア軍の陣地を見やつた。

「早く終わればいいな・・・こんな戦・・・」

シャロンの弦きが夕暮れの丘に静かに消えていった・・・・

「どうじうことですかな？教皇猊下……」

ゼメキア教国軍本営で……

大將軍カインが中央にたたずんでいる。上座には教皇イカロスが座っているが、カインはあえて跪いてもない。

「ロンウェーに輜重隊を指揮させたのは猊下だという話を聞いたのですが……」

「な・・・・なにを・・・・」

イカロスが露骨に動搖するのを見てカインは冷笑した。

「ロンウェーが戻ってきたのですよ。ミルディア軍に解放されました」

カインが合図をすると天幕の中につなだれたロンウェーが入ってきた。

「すべて事情は聞きました……」

カインの鋭い視線にイカロスはぶるりと身を震わせた。

「今度はこのようなことはお慎みください……猊下の直属軍も私の兵もみな神の兵……」

「わ・・・・わかつてある……」

「そう願います……」

そういう残すとカインはロンウェーを促し天幕を出でいった。

「・・・・・・」

残されたイカロスはわなわなと震えだした。

神経質に爪をかみながらイカロスはつぶやいた……

「今に見ておれ……最高権力者は余だ……お前ではない……！」

「ロンウェー」

「はつ・・・・・」

天幕を出たロンウェーにカインが声をかけた。

びくりと身を震わせたロンウェーにカインは微笑みかけた。

「よくすべてを話してくれた。これからは教皇軍には居づらかろう。俺の指揮下にいるといい」

「はつ・・・・・！」

カインの配慮にロンウェーは感激して跪いた。

「時にロンウェー・・・お前を生け捕りにした男のことだが・・・」

「私も驚きました・・・あれほどの剣の使い手・・・しかもその正体は・・・」

ロンウェーの言葉にカインは頷いた。

「まさに伏竜といったところか・・・ルイ・アルトワ・・・」

カインは、すっと目を細めてつぶやいた。

「兄上！」

カインの下にレオナが馬を走らせてきた。

「ずいぶんと士気が落ちているわ・・・」

「うむ・・・・」

「私が次は出陣する・・・・良いわよね？」

レオナの言葉にカインは頷いた。

「お前が出るからには戦果は期待していいんだろうな・・・？」

「もちろんよ。天魔王の一人くらい討てるといいんだけど・・・」

事も無げに言うとレオナは艶然と笑みを浮かべた。

「油断はするな。特にルイ・アルトワという男には気をつけろ」

「お前を生け捕りにした男か・・・？」

レオナはうなだれるロンウェーに視線を投げた。

「信心が足りぬからよ・・・私には神がついている。異教徒などに遅れはとらない・・・」

「もういい、レオナ」

カインが苦々しげに言った。

「攻撃は今夜・・・下がった士気を再度あげるため急ぐぞ。よいな？」

「まかせて」

馬腹をけって走り去るレオナを見送りながらカインは小さくため息をついた。

その夜・・・

ミルディア軍陣営の隅の天幕・・・

ルイがぼんやりと天幕の隅の闇を見つめている。

「シャロンには知られたくないな・・・」

突然ルイがぽつりとつぶやいた。すると闇の中からマリアが姿を現した。

「どんなに気配を絶つてもルイ様にはばれてしまいますが・・・」

マリアの言葉にルイはにっこりと笑った。

「マリアの気配はわかるよ。なんていうのかな・・・僕を心配してくれる気配がするんだ」

「マリアはいつもルイ様を心配していますから・・・」

マリアも思わず笑う。

「それよりルイ様・・・シャロン様には知られたくないたって・・・

・・？」

「ああ・・・」

ルイは大きくため息をついた。

「シャロンはああいう生い立ちだから、どうしても自分を守ってくれる強さに惹かれるんだ・・・」

「だったらルイ様なら・・・」

「だつたらルイ様なら・・・」

「違つんだマリア・・・」

ルイは優しくマリアの頭に手を乗せ、髪をなでた。

「僕はシャロンには僕自身を見てほしいんだ・・・・・」

「ルイ様・・・・・」

マリアはしばらく考えてにっこり笑つた。

「もう一度お話されてきては？ルイ様のお心をお話すればきっとわかつてくださいます」

「そうかな・・・・・ちょっと喧嘩氣味になつたからちよび良いかもね・・・・」

そういうとルイは立ち上がつた。

同じころ・・・・・

シャロンは天幕の外に佇み、星空を眺めていた。

ルイの悲しげな瞳・・・・・考えるときりきりと胸が痛んだ。

「そうよね・・・・ルイにはルイのいいところがあるんだから・・・・・

小さくつぶやくとシャロンは天幕に戻つた。もう一度ルイの顔が見たかった。

「・・・・・あ・・・・・」

天幕の中に入が居るのを見てシャロンは少し驚いた。

「ルイ・・・・・？」

「シャロン・・・・・」

天幕の中に居たのは第2天魔王カイゼルだった。

「どうしたの？こんな時間に・・・・・」

カイゼルに語りかけるシャロンの言葉は届託がない。

彼女にとつてみれば、孤児院から一緒に育つたカイゼルは兄妹のようなものだった。

「今日の軍議・・・・ロンウナーの釈放をどう思ひ？・・・」

カイゼルの問いにシャロンは首をかしげた。

「どう思つもなにも・・・・リチャード様が解放と決めたのよ？」

「ああ、だがその前にあいつが論を動かした、俺は気に食わない」
「…………」

カイゼルは悪意に満ちた嘲笑を浮かべた。

「少しば剣が使えたらしいな。まあロンウニー」と俺やお前でも十分生け捕りにできるがな」

「…………カイゼル…………？」

「わかるだらう？あいつは強くなんかないんだ……」「うわー」とのようにつぶやきカイゼルはいきなり立ち上がりシャロンを抱きすくめた。

「ちよっ・・・何するのよ！？」

「俺のほうがあいつより強い！」

「カイゼル…………！」

「お前を守れるのは俺だけだ！！」

「…………！」

その言葉にシャロンの力が一瞬緩んだ。
「俺のものになれ…………！」

ガタン・・・！

後ろで物音がしてシャロンとカイゼルは振り返った。
そこにたつっていたのはルイだつた。

「…………」

「ル・・・ルイ・・・…」

慌ててルイに歩み寄るうとしたシャロンだったが、その前にルイは天幕を駆け出していった。

「待つて！」

「ほつておけ・・・！」

「離して！！」

シャロンは彼女の腕をつかんだカイゼルを振りほどいた。

絶句したカイゼルを残し、シャロンはルイを追つて外へ駆け出して

いつた。

「・・・・・」

天幕から少し離れた小高い丘にルイはいた。

「ルイ・・・・」

ルイに歩み寄るとしてシャロンは足元に落ちている花に気がついた。

シャロンの好きなミニスクの花だった。

「聞いて・・・・？ルイ・・・・」

「いいんだ・・・・」

ルイの乾いた声にシャロンの体がすくんだ。

「君は・・・カイゼルの強さに惹かれるんだね・・・・」

「違・・・・」

シャロンが言いかけたその時、ルイの剣が走った。

「・・・・！」

自分の喉先にぴたりと止まつた剣先にシャロンは息を呑んだ。

「・・・見えなかつた・・・劍筋が・・・・」

この時シャロンは初めてルイの本当の剣の力量を知つた。

「こんなむなしいものに惹かれるのか・・・・？人を傷つけるだけの力に！」

ルイの目に涙があふれているのに気づき、シャロンは言葉を失つた。

「婚約も・・・君が解消したければそれでいいよ・・・・」

そうつぶやくとルイはシャロンを残し去つていつた。

「・・・・・」

呆然と佇むシャロンの耳に突如、兵の喚声と剣の響きが聞こえてきた。

「・・・・・！」

「申し上げます！」

伝令がシャロンの前にひざまずいた。

「敵の夜襲です！敵兵は2万ほど、総大将はレオナ・アークスです！」

「わ……わかった……」

「今第3、第4天魔軍が迎撃に当たっております。シャロン様にもすぐにご出陣を！」

シャロンは頭をひとつ振ると駆け出した。

ミルディア兵たちが次々と鮮血をほとばしらせ倒れていく。

その死体の輪の中央に居るのはレオナ・アークスだ。

彼女は鎧のみで馬を操り、2本の鉄鞭を両手に縦横無尽にミルディア兵を蹴散らしていた。

彼女の鉄鞭はミルディア兵の鎧ごと肉を引き裂き、ミルディア兵を恐怖に陥れた。

「ぬう……！俺が相手だ！」

巨大な戦斧を振りかざし第4天魔王ゴロアがレオナの前に立ちふさがった。

「お前……天魔王の一人か……？」

レオナの美しい顔に凄絶な笑みが浮かんだ。

「異教徒よ……私の手でせめて魂を浄化してやるつ……」「やれるものならやつて……」

そう叫びかけた次の瞬間、ゴロアは焼けつくような痛みを両腕に感じた。

「ぐ……おおお」

ドスン……と音を立て地面に落ちた戦斧を握った自分の両腕を信じられない思いでゴロアは見つめた。

「死ね……！」

レオナの鉄鞭が一閃し、ゴロアの首をその胴体から跳ね飛ばした。それを見た第4天魔軍は恐慌をきたし一気に総崩れとなつた。

「なんてやつや・・・『ロアを簡単に殺しそうだ・・・」

出動準備が整つた第6天魔軍にキーナは号令を下しつつ身震いした。

「王子は・・・？見つかつたか？」

「いえ・・・！探しておりますが・・・」

「そうか・・・」

「・・・情けない・・・」

キーナは自嘲した。こんな時にルイがいれば・・・そつ思つてしまふ自分が情けなかつた。

「いくで！ウォレスの第3天魔軍を援護する！」

キーナは叫び馬腹を蹴つた。

「引くな！踏みとどまるのだ！」

ウォレスは声をからし叫んだ。

しかし剛勇を誇っていた『ロア』が一撃で殺されたのを見たミルディア兵の恐慌はウォレスをもつてしても收まらなかつた。

「ちつ！…」

ウォレスは目の前に死神の『』とく現れたレオナを見て舌打ちした。
「お前にも魂の浄化が必要だな・・・」

「・・・・・！」

ウォレスは槍を風車の『』とくまわしレオナに打ちかかつた。

「・・・あの鞭の変則的な動きに惑わされてはならぬ・・・」

さすがにウォレスは冷静にレオナの鉄鞭の動きに対処した。
しかし力量の差は歴然としていた。

「ぐあ・・・！」

レオナの鉄鞭がウォレスの右足を深くえぐりたまらずウォレスは落馬した。

「・・・・・」

とどめを刺そうとしたレオナだったがその手を止めた。

「・・・そうだ・・・こいつを公開処刑すればさらに士気が上がる
か・・・」

「ひつ捕らえよ！」

レオナの命令でゼメキア兵が一斉に襲い掛かりウォレスを捕縛した。

「戦果は十分ね……」

レオナは満足げな笑みを浮かべた。

天魔王の一人を倒し、一人を生け捕りにした……これ以上の戦果はない。

レオナの命図の元、彼女の直属兵2万は鮮やかな動きで撤退を始めた。

「あかん……！ ウオレスが……！」

キーナは判断を迷った。ここで追撃してもレオナの前では無駄な犠牲がさらに増える……

「…………」

歩みが止まつた彼女の横を疾風のようにルイが駆け抜けた。

「ウオレス……！」

悲痛な叫びとともにルイはたつた一騎でゼメキア兵に斬り込んだ。ゼメキア兵を次々と手にかけながらルイは、引き立てられていくウォレスを追いかけようとしたがゼメキア兵の厚い壁に阻まれて距離は遠のくばかりだった。

「ウォレス！ だめだ……！ ウオレス……！」

「王子！ あかん！ これ以上深追いするのは無理や！」

キーナがルイを抱きとめなかつたら、おそらくルイは追撃をやめず戦死していたかもしねりない。

「離して下さい！ ウオレスが……！」

「王子！ ……」

暴れるルイを向き直らせキーナはルイの頬をたたいた。

「しつかりしてください……！ ここで追いかけてもウォレスを取

り戻したりでもくん…」

「でも・・・・」

「死人が増えるだけや。それは王子が一番望まん」とやうに…?」

キーナの言葉にルイは呆然として退却していくレオナの軍を見送っていた・・・

決意

ミルティア軍の動搖は相当なものだった。

無理もない、最強を誇った天魔王の一人があつと/or>う間に殺され、さらに一人が兵たちの目の前で生け捕られ連行されていったのだから……

リチャードの天幕にすべての天魔王が集まっている……
ルイ一人を除いて……

「マリア……ウォレスの様子は確認できたか？」
リチャードの問いにマリアが進み出た。

「はい……ゼメキア軍はウォレス様を公開処刑するつもりのよう
です。彼らの話すところによると予定は2日後の早朝……」

「そうか……」

リチャードは小さくため息をついた。

「敵はまたかさにかかるつて攻め寄せてくるだろう。油断するな……」

「ウォレスの奪還は……」

シャロンの問いかにリチャードはかぶりを振った。

「だめだ……犠牲が大きすぎる」

「しかしわが君……ウォレスはこの国に……」

「言つな……」

リチャードが静かにしかし重々しくシャロンの言葉をさえぎつた。

「ウォレスはわが戦友だ……しかしそれとこれとは違う。今戦つても兵の動搖が大きすぎる。お前とておびえる兵を率いて敵とは戦えまい?」

「……」

シャロンは言葉に詰まつてうつむいた。

同じ頃・・・・

ゼメキア軍の陣営内獄中・・・・

「第3天魔王ウォレス・・・・」

鎖につながれたウォレスの前にカインが佇んでいる。レオナから受けた足の傷は手当もされず血が流れ続けている。

「不覚を取つたものだな・・・・」

「・・・・・・」

ウォレスは静かに目を開きカインを見た。

「どうだ？その武勇、知略・・・捨てるには惜しい。改宗すると言う名田で俺の部下にならぬか？」

「・・・・・・」

「俺は異教徒だろうが有能な人間をあたら殺させるのを惜しく思つリチャードの言葉にウォレスはわずかに笑みを浮かべた。

「光榮なことだ・・・カイン・アークスにそれほど認められるとな・・・・」

「・・・・・・」

「だが、俺はある方に忠誠を誓つた身だ。その方を裏切ることはできない・・・・」

「リチャード・アルトワか？」

「もちろんリチャード様には忠誠を誓つてゐる。だが俺の言つているのは違う方だ・・・・」

「・・・・・・？」

カインはわずかに首をかしげた。

「おぬしもいづれその田で見る」とになるだろう・・・・の方の本当の力を」

ウォレスは小さくつぶやくと苦しげに田を開じた。

「・・・・・・」

カインは立ち上ると獄卒に合図をした。

「足の傷の手当をしておけ」

「はっ・・・・・しかしこやつは異教徒ですぞ？」

「2日後に処刑する前に死ぬぞ？公開処刑の意味は知っているだろ
う、お前でも？」

カインの有無を言わさぬ眼光に獄卒は震え上がり頷いた・・・

一方・・・・

「よくやつた！レオナ・アークスよ！そなたは神の兵を率い見事な
戦果を挙げた！」

甲高い教皇イカロスの声が天幕中に響いていた。

「はっ・・・・！神の加護があつたまでのことと思つております。」

レオナの言葉にイカロスは満足げに頷いた。

「おぬしの信心の深さは頼りにしてある。神の威光を示すにおぬし
のような者があるとわしも心強いぞ」

「はっ！」

拝礼するレオナにイカロスは有頂天に言葉を続けた。

「時にレオナよ」

「はい」

「ミルディア軍はまだ動搖から抜けきつてはおらぬはず。明日の昼
もう一度攻撃をかけるのじゃ。そして天魔王とぬかす異教徒の頭目
をまたひつとらえてまいれ・・・！」

「・・・・・」

レオナはわずかにためらった。

ミルディア軍とて鳥合の衆ではない。もう一度攻撃をかけたところ
で昨日のような成果はあげられないことくらいレオナとてわかつて
いた。

「どうした・・・？」

イカロスは神経質に爪をかんで言葉を重ねた。

「おぬしの信心を神が試されておるぞ？」

「…………はっ！すぐに準備に取り掛かります！」

『神』という言葉にレオナははじめたように答えた。敬虔なゼメキア教徒である彼女にとってその言葉は絶対だった。

そのころミルティア軍本営では……

ルイが足早にリチャードの本営に向かっていた。

眠つてもいられないらしく、目が血走り顔も血の気が引いている。

「ルイ・・・・！」

ルイの目の前にシャロンが立った。ルイが悲しげに目を伏せるのを見てシャロンは胸が詰まりそうだった。

「お願い、話を聞いて……」

「今は……忙しいんだ……」

ルイはかすれた声でつぶやくと、シャロンをつきのけ歩き出した。

「ルイ・・・・！」

「僕は信じてたんだ……」

ルイは足を止めてつぶやいた。

「君だけは……僕自身を見てくれているって……」

「見てる……私はあなたを見る……」

「じゃあなんで……！」

ルイが血の出るような声で叫んだ。

「もういい……聞きたくない……」

ルイはたちつくすシャロンをおいて再び歩き出した。

その二人の様子を遠くからキーナが見守っていた。

「…………なんや……そういうことか……」

キーナは口を閉じため息をついた……

「なんのようだ……」

天幕に一人入ってきたルイを見てリチャードは静かに言葉をかけた。

「お願いがあります」

ルイの瞳には尋常ではない光が宿っていた。

「僕に第1天魔軍と、ゴロアさんがいなくなつた第4天魔軍、そしてウォレスの第3天魔軍の指揮をさせてください・・・」「仮にそれを許可したとして・・・」

リチャードは苦々しげに言った。

「どうしようというのだ・・・?」

「ゼメキア軍を壊滅させます。ウォレスを奪還する・・・!」

ルイの答えは単純だつた。それだけにそこに秘められた血の出るような思いをリチャードは十分感じ取つた。

「ルイ・・・」

ルイを見つめるリチャードの目は父親そのものだつた。

「お前ならば・・・おそらくはそれを成し遂げるだらう。」「・・・では・・・?」

「勘違いするな」

リチャードの厳しい言葉にルイはびくりと体を震わせた。

「仮にウォレスを奪還できたとして・・・いや、お前ならできると思つ。しかしどれだけの兵が死ぬことになる・・・」「・・・・・・」

「お前のその力・・・お前はこの国の大切な人たちを守るためにだけに使いたい・・・お前のその言葉を信じたからこそ私はお前を国事には今まで交えることをしなかつた」

「・・・・・・」

「だがお前の言う大切な人を守るとは、一人の人間を守るためにこの国の民である兵たちを多数死なせることなのか・・・?」「でも・・・・ウォレスがこのままじゃ・・・」

ルイはうなだれた。

「ウォレスは僕自身を見ててくれた。ウォレスはいつだって僕の味方だつたし支えにもなつてくれた・・・そんな彼を見捨てることは・・・」

「懸か者・・・・」

リチャードは静かにルイの言葉をさうぎつた。

「誰がウォレスを見捨てよと言つた・・・・」

• • • • ?

「お前の狙い通り今教皇とアーカス兄妹の間には大きな溝ができる。いや・・・厳密には教皇とリチャード・アーカスだ。」

「ルイのいぶかしげな顔にリチャードは苦笑した。

「まだわからぬか・・・レオナ・アークスは敬虔な・・・というより盲目的にゼメキア教を信じている。そのレオナは教皇にとつては便利な駒になる。輜重隊の一件で恥をかいた教皇は必ずもう一成果あげたくてレオナに出撃の命令を出すはず。ウオレスの処刑前にな・

• • • • • • !

「捕虜を奪還する手段はなにも力攻めだけではない。仮にこちらも向こうの重要人物を押さえた場合は簡単に成立する・・・奪還ではなく交換というかたちでな・・・」

ルイははじかれたように顔を上げた。

「おはよう」
「おはよう」
「おはよう」
「おはよう」

「そしてそれ以後お前の能力はすべての人間が知るところとなる・・

「……」さくらを見渡すが

か
？
』

「ウオレスの命にはかえられません……」

「…………」ルイは立ち上がりつた。その目は普段のルイそのものに戻っていた。

天幕を出て行き際

天幕を出て行き際にルイはリチャードに微笑みかけた。

「今までの親不孝・・・お許しください。そして今のお言葉・・・

感謝いたします

「ゆけ・・・迎撃の指揮は任せる。第6天魔軍がよからうつへ」

「はい・・・」

笑顔で出て行つた息子をリチャードは優しい目で見送つた。

「・・・ゴボツ・・・」

リチャードは小さく咳き込み口元を手でぬぐつた。

「頼むぞ・・・」

手についた血糊をマントの裾でぬぐいながらリチャードはつぶやいた。

集まつた天魔王たちはいぶかしげな顔でルイを見つめていた。リチャードの命令とのことで集まつた彼らを待つっていたのはルイだつた。

「今日・・・おそらくまたレオナ・アークスが攻めてきます」
「・・・・・！」

ざわめく天魔王たちにルイがさらに言葉を重ねた。

「迎撃の指揮は僕が取ります。この件は父上からも承認を得ています・・・」

「馬鹿な・・・！」

第2天魔王カイゼルがせせら笑つた。

「あなたの指揮？冗談はほどほどにしてください・・・」

「カイゼル・・・・！」

シャロンがカイゼルの言葉をさえぎつた。

「作戦を・・・聞いてからでも反対するのは遅くないわ・・・」
「・・・・・・・」

カイゼルはじろりとシャロンを見て口をつぐんだ。

「迎撃は第6天魔軍のみ。ゴロアさんの第4天魔軍、ウォレスの第3天魔軍は・・・」

ルイはシャロンを見た。

「君が指揮するんだ。ただ敵との交戦はしない」と。父上の本當を守つてくれればいい……」

「俺はどうしようと……？」

カイゼルの挑戦的な言葉にルイは静かに答えた。

「第2天魔軍は伏兵として戦闘行動には参加しないでもらいます。万が一レオナ・アーツを第6天魔軍が取り逃がした場合のみ退路を断ち、彼女を生け捕りにしてもらいたい……」

「ルイ……わかるように説明して？ 第6天魔軍でレオナを生け捕りにしようとしているの？ ビジワッテ……？」

「簡単なことだよ、シャロン」

ルイはこともなげに言った。

「僕が生け捕りにする。万が一逃げられた時には保険としてカイゼルにお願いしたいと思う。」「

「保険だと……！？」

カイゼルが苛立たしげに叫んだ。

「いい加減にしろ！？俺ならばともかくキーナの軍でお前があのレオナを生け捕りにするだと！？」

「…………」

「やきが回つてるんじゃないのか？ キーナと一緒にいたいのなら軍の後ろでやつてればいい……！」

「なんやで！？」

カイゼルの言葉にいきりたつたキーナを制して、ルイが静かにカイゼルの前に立った。

「カイゼル……今の非礼を僕に謝罪するんだ。さもないと……」

「さもないと……？ どうするんですか？ 王子様？」

馬鹿に仕切った態度でカイゼルが切り返すのを見て、シャロンが顔色を変えた。

「ダメ……！ カイゼル逃げて！」

「いりうするのさ……！」

シャロンの叫びとルイの言葉が交差した。

「・・・・・！」

ルイの踏み込み、抜剣、斬撃はほぼ同時だった。
かろうじて後ろに身をのけぞらせたカイゼルの首に、一筋の赤い線
が浮き上がった。

ブツリ・・・・

小さな音を立てて首の皮がわずかに裂け、血がうつすりとこじんだ。
<・・・こいつ・・・俺を殺す氣だつた・・・・・・>

シャロンの言葉がなければ殺気に気づくのが遅れ、ルイの剣をまと
もにうけていた・・・

カイゼルは慄然とした。明らかに自分を上回る剣だった。

「わかったかい？君がなぜ保険として後方支援するのか・・・・・
ルイは剣をおさめて静かに言った。

「君がやるとレオナ・アークスを殺してしまいかねない。今回の任
務は生け捕りだ。だから実力差のある僕でなくてはいけないんだ・・

・

ルイはそういうと天幕を出て行つた。

「ルイ・・！待つて！」

シャロンが天幕の外でルイに叫んだ。

「・・・・・」

「ルイ・・・思いつめないで。ウォレスを救いたいのは私も同じよ・
・・

シャロンはため息をついた。

「あなたが仕損じてもそれはあなたのせいじゃない・・・あなたは
こんなことできる人じゃないのに・・・」

「・・・・・」

ルイは黙つてうつむいている。

「『めんね・・・こんなことをさせて。私にもっと力があれば・・・

「シャロンの声が詰まつた。

「全部をあなたに背負わせてしまつた・・・」

「今はこれしかないんだ・・・」

「ルイはかすれた声でつぶやいた。

「ウォレスの命を救うには・・・僕がやるしかないんだ・・・」

そういうとルイは歩き出した。

「ルイ・・・！」

なおも言葉をかけようとしたシャロンの方をキーナがつかんだ。

「もうやめときや・・・」

「キーナ・・・」

「シャロンちゃんが何を言おひともひ無黙や・・・」

キーナは口を捨てるのみで、ルイのあとを追つていった・・・

「・・・」

シャロンは黙つて空を見上げた。

この戦いはすべてを変える・・・

なぜかはわからないうが、シャロンはそう感じていた・・・

真の力

照りつけるような日が頭上にさし掛かった頃……

直属兵2万を整列させ、出撃準備を整えたレオナのもとにカインがやってきた。

「何を考えている……」

カインの言葉にレオナはぱつが悪そうに目を伏せた。

「お前とてわかるだろ？ 前の襲撃が成功したのは夜襲で敵の虚をついたからだ……今この真昼間に堂々と攻めかけたところで前のような戦果は望めないぞ……？」

「わかつてゐるわよ……そんなこと……」

レオナは細い眉をひゅつとひそめて言った。

「ただ……神のご命令にはさからえないわ……」

「命令をしているのは神ではない……教皇だ」

「そして教皇様は神の地上における代行者よ……？」

レオナの答えにカインはため息をついた。

聰明な妹の唯一の弱点……それは『神』といつ名の下にあの男の言いなりになってしまつところだ……

「レオナ……」

「大丈夫、心配しないで？ 軽く一当たりして戻つてくる。無理はないわ……」

レオナは颯爽と騎乗し、兄に笑いかけた。

レオナの号令の元、地を搖るがしレオナ・アークス直属軍2万は突撃を開始した。

「見事なもんですね……」

その様子を遠望しルイはつぶやいた。

「一兵にいたるまで命令が完全に行き届いている……すうじいな、レオナ・アーツは……」

「感心してる場合やないで……」

横にいたキーナがつと手を伸ばし、ルイの目元に触れた。

「…………？」

「じつとしどき……」

手早くキーナがルイの目元に施したのは彼女の部族の戦闘の化粧だつた。

「キーナさん……」「

「第6天魔軍はあんたと共に戦つ……これはその証や」

キーナはにつこりと笑つた。

「さあ……行こうか……」

二人は馬にまたがり前線に向かつた。

地響きを立てせまりくるゼメキア軍が500歩の距離に迫つた時、キーナの号令の元第6天魔軍の一斉掃射『死の雨』が天を覆つ黒い雨となつて降り注いだ。

次々と正確な騎射技術によつてゼメキア兵がもんどうつて倒れた。

「ちつ！」

降り注ぐ矢の雨を払いながらレオナは舌打ちした。

兄カインの言つたとおり、襲撃を読まれていることと、そして何よりも前衛に一斉掃射を得意とする第6天魔軍がいることでさらに犠牲が大きくなる。

「射返せ！」

レオナは直属軍のさらに精銳部隊5千を切り離し一気に第6天魔軍に斬り込んだ。こうすることとで距離をつめ、まずは一斉掃射をとめることができ狙いだつた。

そして敵を混乱させる間に、後続部隊が襲い掛かる……

だが……

「・・・・！」

レオナの思惑は見事に外れた。

まるでその動きを読んでいたかのように、掃射がぴたりとやみ突出したレオナとその精兵5千の突出した隙に第6天魔軍が一気に割り込んだ。

「馬鹿な・・・！」

レオナは舌打ちした。

完全に思考を読まれていた・・・・?しかしレオナはまだ慌ててはいなかつた。

レオナは第6天魔軍の包囲網の一 角に手勢を集中させ、包囲網の突破を図つた。

レオナの手には昨夜の鉄鞭ではなく、蛇矛と呼ばれる異形の武器が握られている。

槍のように長い柄の先には蛇のようにのたくつた長い刃がついている。この刃できられると傷はきれいにはふさがらず仮に命はその時は免れても後々に傷口がふさがりきらはず死に至る恐怖の武器だ・・・

「かかつてこい、異教徒共め・・・！」

レオナの蛇矛がうなりを上げ、あつという間に数名のミルティア騎兵を血しぶきの下にのけぞらせた。

「・・・・・・！」

そのレオナの前にルイが馬を躍らせた。

「何者だ・・・?異教徒の頭目か?」

「僕はルイ・アルトワ・・・・」

「・・・・・・！」

聞いたことがある・・・

「お前がロンウェーを生け捕りにした・・・」

レオナの口元に残忍な笑みが浮かんだ。兄ですら一日置いたこの男を殺せば兄も自分の実力を今以上に認めてくれるはず・・・

「呪われた異教徒に魂の浄化を……！」

レオナは一気にルイに馬を寄せ、必殺の一撃を見舞った。

キーン！！

当然にいつもの鎧ごと斬り割る感触を味わえると思っていたレオナの意図に反し、蛇矛は音高くはじき返された。

「な・・・・」

思わず手の痺れにレオナは目を見張った。

「すみませんが、生け捕りにさせてもらいます……」

ルイのおよそ戦場には似つかわしくないすまなぞそうな口調に、レオナは逆上し我を忘れた。

「やれるものならやつてみよ！」

レオナは蛇矛を握りなおし、全力でルイに打ちかかった。しかしルイの長剣は難なくレオナの斬撃をはじき返し続け、数十合打ち合ひついにレオナの両腕が悲鳴を上げ始めた。

「ちつ・・・・！」

レオナはあせり始めた。

これはまるで兄カインとの稽古のようだつた……この男の剣技は兄カインに匹敵する……

「あつ・・・・！」

ルイの斬撃をうけきれず、レオナの蛇矛が宙をまい地面につきたつた。

- ・ 次の瞬間ルイの剣の平がレオナの腹部を強打し彼女は気を失つた……

「やつたな！王子！」

「はい・・・・」

ぐつたりとしたレオナをルイは自らの乗馬にひきあげた。

「レオナ・アークスを生け捕つたこと、敵軍にわかるように全軍に叫ばせてください。退路を必ずあけておくことも忘れないで……」

「了解……！」

指揮に戻るキーナを見送り、ルイは本營に馬首を向いた……

「馬鹿め……」

戦況を遠望していたカインは舌打ちした。

後続を切り離して突撃をかけた時点でレオナの判断の誤りを悟ったカインは増援軍を差し向けたが時すでに遅し……レオナがミルディア軍の手に落ちたことを知ったのはそのままなくのことだった。

「レオナ様は名の知らぬ若き將軍と一緒に打ちをされ、そやつに生け捕られました……！」

兵の報告を聞いたカインはつめいた。

「まさか……ルイ・アルトつか……？」

「おそらくは……」

そばにいたロンウローが頷いた。

「それがしばやつの剣技の一端しか見ておりませぬが、レオナ様といえども……」

「ち……」

カインは傍らの兵を見やつて言った。

「ミルディア軍捕虜のウォレスを、じつに引き取つてくれるのだ……！」やつらの狙いは捕虜交換だ……

カインは天を仰いでため息をついた。

「う……」

レオナは目を覚ました。

「……！」

その瞬間レオナははねおき、剣を探した……が、もちろんのこ

と彼女の周りには武器は一切なかつた。

「・・・・・」

レオナは痛む腹部を押さえながら、辺りを見回した。

牢獄というより天幕に近い・・・・・

「気がつきましたか・・・・・」

少し距離を置いて椅子に座っていた青年がにこりと笑つた。

「ルイ・・・アルトワ・・・・」

「はい・・・はじめまして、レオナ・アークスさん」

「・・・・・・・」

レオナは敵意に満ちた目でルイをにらんだ。

「異教徒め・・・何を考えている？なぜ私を殺さず捕らえた！？」

「大事な友達をかえしてもらつたためです・・・・」

ルイは屈託のない笑顔で答えた。

「あなたの兄上ならこの交換には応じてもらえると思つています」

「・・・・・・・」

レオナは悔しさで全身が火の様に熱くなるのを感じた。

「大丈夫ですか？力をついつい入れすぎちゃつて・・・・」

苦しげなレオナの様子にルイは気遣わしげに言つた。

「だ・・・黙れ・・・・！」

言葉を重ねようとしてレオナは呻いた。

「しばらくここでゆつくりしていつてください。あなたの身の安全は僕が保障します。」

「馬鹿な・・・早く捕虜交換でもなんでもすればいいだろ？・・・・

！？」

「見てもらいたいんです・・・・」

ルイの言葉にレオナは絶句した。

「あなたの神のいう『異教徒』たちがどういう人間なのかを。あなたたちの宗教では生きることすら許されない僕たちミルディア人に

も血が通っていること、心があることを分かつてほしい……」

「…………お前たちは呪われた存在なのだ……」

レオナの言葉にルイは肩をすくめて見せた。

「どうでしょう……僕から見ればあなたこそ何かの力に呪われているように見えますが……」

「…………！」

目を見張つたレオナを残しルイは天幕を後にした。

「マリア……」

「はい……」

影のように付き従つ赤い瞳の少女にルイは微笑んだ。

「大丈夫、レオナさんは賢い人だ……きっとわかつてくれる……」

「どうでしょうか……あの方はゼメキア教を心底崇拝しておられます。私の追放裁判だつて……」

マリアは目を伏せた。

その少女の頭をルイの手が優しくなでた。

「大丈夫。ともかくこれでウォレスの処刑はなくなつた。少し時間をかけてレオナさんの目を覚まさなきやこの戦いは終わらない……」

「はい……お考えはよくわかつています。」

「有難う、この天幕の護衛はしつかり頼むね……」

ルイはマリアにっこり笑いかけ歩き去つていった。

「ルイ様なら……」

マリアはそんなルイの後姿を見送りながらぼつりとつぶやいた……

迷い

「異教徒を獄中から出したそ、うじやなー、どうこいつもいじやー?」

ゼメキア軍の陣営・・・

教皇イカロスの甲高い声が響いた。

「レオナとの捕虜交換に使いますか・・・?」

カインはそれがどうしたのだと言わんばかりの口調で答えた。

「ゆ・・・許さぬ! せっかく捕らえた異教徒の頭目を・・・。」

「ではわが妹を見殺しになるおつもりか・・・?」

カインの鋭い眼光にイカロスはたじたじとなつた。

「そ・・・そうは言つておらぬ。ただ神のご加護がレオナになくそれがゆえに捕まつたのじゃ」

「信心がたりなかつたと・・・?」

カインがいきなり立ち上がつたのでイカロスは思わずびくりと身を震わせた。

「一つご承知おき願いたい・・・」

「・・・・・」

「わが妹レオナは敬虔なゼメキア教徒。それは誰もが認めるところ。レオナの信仰をもしもお疑いとあれば、それがしにも考へがあります・・・」

「れ・・・レオナの信心はようわかつてある・・・心配いたすな」

イカロスは神経質に爪をかみながら頷いた。

<・・・危険な男だ・・・>

カインは苦々しくイカロスを見やつた。青筋を浮かべぎりぎりした目で爪をかんでいる・・・

こんな男の命令に従つたばかりにレオナはミルディア軍の手に落ちた・・・

「ミルディア軍に使者を出せ。捕虜交換の準備だ・・・」

カインはもつ何度も田かになるため息をついた・・・

そのころ・・・

ミルティア軍の天幕で・・・
捕虜・・・といふ扱いではなくむしろ密を過すような扱いの天幕の中・・・

レオナは苛立たしげに天幕の中を歩き回っていた。

一步でも外に出れば見張りが目を光らせており、さすがのレオナもここから一人で遁走を試みることはできない。
あの忌々しい異教徒ルイが言つたとおり、カインの捕虜交換の段取りに身をゆだねるしかなさそうだった。

「・・・・・」

「・・・・お前が男であつたなら・・・・・」

脳裏にあの人の声が響き、レオナは懸命にかぶりをふつた。

「私だつて・・・・・」

ぼそりとレオナはつぶやき、寝台に横たわり目を閉じた・・・

「・・・・お前が男であつたなら・・・・・」

「・・・・やはり兄には勝てぬな・・・・・」

「・・・・所詮は女か・・・・・」

「・・・・・！」

レオナは飛び起きた。瞬間まどろんでいたらしい。

「・・・嫌な夢・・・・・」

レオナは額に浮かんだ汗をぬぐつた。

「あつ・・・・！」

気がつくとすぐそばにルイが座つていた。どうやらレオナは剣を探

そうとしてはつとした。

そうだった・・・ここは異教徒の陣だった・・・

「大丈夫ですか？隨分うなされていたみたいですけど・・・」

「・・・」

ルイは食事を載せたトレーをレオナの前においた。

「食べてください。何も食べなかつたら体に毒ですよ？」

「・・・」

レオナは黙つて目をそらした。

「レオナさん・・・僕を見てください」

「・・・」

「あなたと僕と・・・何が違うんですか？」

「ゼメウスの神の加護を受けていない・・・」

ルイの問いにレオナは即答した。

「その神は宗教に属さない者たちの殺戮を認めるんですか・・・？」

ルイの問いは容赦なかつた。

「もう一度言います。僕を見てください。あなたと同じ人間です・・・同じように心を持ち同じように大切な人を持ち、そして同じように血を流す・・・」

「違う・・・！」

レオナは呻いた。

「お前たちは淘汰されるべきなのだ・・・それは神が決めたこと！私はそれに従うまでだ！」

レオナはルイが持ってきた食器をつかみルイに投げつけた。

ガチャーン！

皿が割れ、破片でルイの額から血が流れた。

それでもルイはレオナから視線をそらさない。

「神が決めたこと・・・？あなたは教皇イカロスの言うことに従つているだけだ・・・」

「教皇様は神の地上における代行者であり代弁者だ・・・」

「教皇イカロスの人となりは僕も聞いています・・・」

ルイはまっすぐにレオナの瞳を見据えた。

「彼は神の名を語つてゐるだけ……あなたにはそれがわかつてゐるはずだ……」

「う・・・・・うるさい・・・！」

レオナは耳をふさいだ。その手をルイがつかんだ。

「この侵略のどこに正義があるんですか？異教徒は生きてちゃいけない？でもその異教徒にも家族がいる者や守りたい大切な人がいる者もいるんです……！」

「だまれえ！」

レオナが叫び思い切りルイを突き飛ばした。

「・・・・！」

次の瞬間・・・疾風のようによみがれマリアが天幕の隅から現れ、レオナの喉に短剣をつきつけた。

「いいんだマリア・・・大丈夫」

ルイはマリアに微笑みかけた。だがマリアは短剣をおさめようとしない。

「じゃあこの子はどうなんですか・・・」

ルイはレオナを見て言った。

「この子はいい子なんです。とても優しくて・・・まだ小さいのに僕なんかよりとてもしつかりしてる。いつでもこうやって僕のことを心配してくれるとても優しい子・・・」

ルイはそっとマリアの短剣を取り上げながら言った。

「不吉の瞳・・・そうよぶんですかよね？あなたの国では・・・」

「・・・・・」

ルイの言葉にレオナは俯いた。

「こんなにいい子さえも受け入れられないというのなら・・・ゼメウスの神の度量も小さなものですね・・・」

そう言つとルイは天幕を出て行つた。

「・・・・・」

天幕に残つたマリアをレオナは敵意のこもつた目でにらみつけた。
「いい気味だと思うだろう・・・?お前の追放裁判に私も列席し、
追放に賛成の書類に署名したのだからな・・・」

「ルイ様は・・・」

マリアがぱつりと言つた。

「食べ物もなくて・・・疲れきつて死に掛けていた私を拾ってくれ
たんです・・・」

「・・・・・・・」

「私はこの呪われた不幸の瞳を隠したくて隠したくて・・・ずつ
と髪を長く伸ばして目を隠してました・・・」

マリアはレオナに笑いかけた。

「でも・・・ルイ様は、初めて私を見た時、この瞳を『綺麗な目だ
ね』って言つてくれたんです」

「・・・・・・・!」

「この瞳のせいで私は生きていく場所がなかつた。自分の親さえも
私をまともに見てくれなくて・・・ただ人を殺す術だけを学んでき
た・・・そんな私のこの瞳を綺麗だつて・・・」

マリアはにつこりと笑つた。

その笑顔のまぶしさに思わずレオナは目をそらせた。

「私にはそれで十分でした。ルイ様がいる・・・それが私が生きて
いる今の理由です・・・」

そう言うとマリアは立ち上がつた。

「だから・・・もしあながルイ様の邪魔をするのなら・・・」

マリアは天幕を出て行き際につぶやいた。

「私は喜んで人を殺す術をあなたに使う・・・ルイ様にはもう使つ
なと言わわれていますが・・・」

「・・・・・・・」

天幕からマリアの気配が消えた。

レオナは黙つて天幕の隅を見つめた。

「私は・・・・・」

レオナの低い呟きが闇に静かに飲み込まれた・・・

翌朝・・・

レオナは疲れぬまま朝を迎えていた。

「・・・・」

レオナはそつと天幕の外をうかがつた。
誰の気配もない・・・逃げられるとは思っていないし、逃げるつもりもない。

どうせ兄が今捕虜交換の手続きを整えているはず。
ただこの天幕の外から出て新鮮な空気が吸いたかった。

「いるのだろう? 私は天幕の外に出る。逃げるつもりはないが見張りたいなら見張っている」

レオナは自分を見張っているであるマリアに向けて独り言を言つと、天幕のそこにでた。

「・・・・・」

レオナは小さくため息をついた。

<・・・あなたと僕は同じ人間だ・・・>

ルイの言葉が頭から離れなかつた。

情けも知らず穢れた存在であるはずの異教徒ルイが、自分たちが追放した不吉の瞳の少女を保護していた。しかも感情を捨て去るよう訓練を受けたはずの暗殺者の少女のあの笑顔は・・・
「慈悲の心・・・か・・・」

<・・・馬鹿な・・・>

レオナは自分でつぶやいて慌ててかぶりをふつた。

そんなはずはない。教皇様の教えによれば、異教徒に慈悲の心など

あるはずがない・・・

「・・・・・？」

レオナは立ち止まつた。

小高い丘の上に人影を見つけたからだ。
まだ朝日が昇つたばかりの朝もやの中・・・人気のないところでそ
の人影はうすくまつっている。

「・・・・・あいつだ・・・・・」

背格好からレオナはその人影がルイであることに気づいた。

「・・・・・なにをしている・・・・?」

レオナは静かにルイに近づいた。

「・・・・・!？」

レオナはルイの姿に息を呑んだ。

ルイは地面にうすくまり胸の前で手を組み祈りの格好をして目を閉
じていた。

「・・・・・祈りをささげていてる・・・・?」

「お静かに・・・・・」

突然背後でマリアのささやく声がした。

「・・・・・！」

振り返つたレオナにマリアはかぶりをふつた。

「このお時間は・・・・邪魔をしないでくださいませ・・・・
「何をしているのだ・・・・あいつは・・・・」

レオナはささやき返した。

「お祈りでございます・・・・」

「祈り? ミルディアにも神がいるのか・・・・?」

「いいえ・・・・この国は無宗教です・・・・」

「では何に祈つているのだ?あの男は・・・・」

レオナの言葉にマリアは静かに微笑んだ。

「『自身に・・・・でしようか・・・・』

「・・・・？」

レオナはマリアの言葉の意味がわからず口をつぐんだ。

祈りをささげるルイの姿はある種の神々しささえ感じさせ、レオナは思わず目を奪われた。

「あの方の祈りは強さへの願い・・・大切な人を守れる強さを。そして同時にそれがゆえに自分が奪つた命への懺悔の祈りも・・・」「強さと・・・懺悔・・・」

レオナは言葉を失つた。

「・・・あの男・・・泣いている・・・」

祈りをささげているルイの瞳からは涙が流れていった。

「優しい方なのです。自分のたてた作戦でたくさんのミルティア兵、そしてゼメキア兵が死んでいく・・・その事自体に心を痛めておられます・・・」

マリアの赤い瞳がレオナを見上げた。

「ゼメウスの神は本当に喜んでいるのでしょうか・・・あのような優しい涙を見てもそう思われますか・・・?」

「・・・・・」

レオナはマリアの問いかには答えずきびすを返すと天幕に向けて歩きだした。

しばらく後、ゼメキア教国側より捕虜交換の依頼の使者が到着し、ルイの狙い通り捕虜交換が成立することになった。

「狙い通りだな・・・」

集まつた天魔王たちの前でリチャードがルイに言った。

「はい・・・」

ルイは静かに頷いた。

カイゼルが忌々しげに横を向くのをキーナが苦々しげにこらむ。

「捕虜交換は誰が行く・・・?」

「僕が行きます。」

ルイの言葉にキーナがかぶりをふつた。

「万が一罷があつたらどうするんや？」

「それはないですよ。」ヒッチが抑えているのはアーツ兄妹の妹ですから・・・」

ルイはにっこりと笑つて言つた。

「むしろ何かあるとしたら、彼女が陣に戻つてからかも・・・」

「・・・・・？」

いぶかしげな天魔王たちにかまわずルイはリチャードに向き直つた。「向こうの条件どおり、僕一人でレオナさんを連れて両軍の中間地点まで行きます。」

「・・・・・わかつた・・・・」

リチャードは重々しく頷いた。

「委細はルイに任せる、皆もそれでよいな？」

「はつ・・・・！」

リチャードの言葉に天魔王たちは跪き答えるしかなかつた。

「行きましょうか・・・・」

ルイが馬にまたがりレオナを振り返つた。

「・・・・・」

馬にまたがつたレオナは黙つて頷いた。

衣服、乗馬・・・武器を除くすべてが与えられている。もし自分が遁走したらどうするつもりなんだろう・・・

「信じてますよ・・・・」

レオナの心を見透かしたかのようにルイがレオナに笑いかけた。

「・・・・・！」

「あなたは公正な人だ。捕虜交換の話をあなたの兄上が持ちかけてきた状態で、約定をやぶるようなことはあなたがするわけがない・・・

・・・

「当然だ・・・私は・・・・」

いいかけてレオナは口をつぐみ馬を進ませた。

「私の父は・・・・・」

捕虜交換地点に向かいながらレオナがぽつりと言った。

いつも言つてゐた・・・『お前が男であれば』と・・・『

卷之三

アーティストは代々要職には必ず男がついてきた。女がついたことは私が初めてだ……

「す」「一」んですね、

卷之三

屈託のないルイの言葉にレオナはまじまじとルイを見つめた。

「私は何をやつても兄には敵わない・・・政治も・・・用兵も・・・そして剣技も・・・父に認められたくて私は必死に努力した・・・だが父はそもそも女である私がそういうことを行うこと自体を嫌つていた・・・」

二

「だから私はせめて神の忠実な僕になろうとした・・・現実主義者

「レオナさんはカインさんが嫌いなんですか？」

ルイの言葉にレオナはかぶりをふつた。

「そんなわけがないだろう！私にとつて兄は大切な人だ・・・！」

「……………」

ルイはにつこりと笑つて言つた。

「いいじゃないですか。」

・・・・！？

「お父上がどう言おうとレオナさんはレオナさんなんだし、カインさんに勝てなくたってあなたがカインさんを大切に思っているんだから、何の問題もないじゃないですか？」

レオナは言葉につまり俯いた。

なんでこんな話を私はしているのだろう・・・しかも異教徒の頭目
に・・・

「お前は・・・」

レオナが言いかけたときルイが馬の歩みを止めた。

捕虜交換地点・・・そこにいたのはカイン・アークスと数名の警護兵、そして捕虜となつたウォレスだった。

「ルイ・アルトワ殿とお見受けする・・・」

「カイン・アークスさんですね・・・」

ルイとカインの視線がぶつかり合つた。

「捕虜交換の申し出・・・有難うございました・・・」

ルイがにっこりと笑つて言つた。

「礼を言われるか・・・」

カインは苦笑した。

「さあ・・・レオナさん・・・」

ルイに促され、レオナはゆっくりと進み出た。

カインの命令でウォレスも引き立てられながら進み出てきた。

「・・・」

カインは思わず口元をゆがめた。

傷一つなく、賓客のような様相のレオナに対し、拷問につぐ拷問でやつれ果てたウォレス・・・
く・・・これではどちらが神の兵だ・・・>

自嘲するとカインはレオナを見やつた。

「大丈夫か・・・？レオナ」

「ええ・・・」めんなさい・・・

「ウォレス・・・！」

片膝を着いたウォレスにルイが慌てて馬を飛び降り駆け寄つた。

「坊ちゃん・・・」

「大丈夫かい？もう安心だよ・・・」

傷ついたウォレスに肩をかしてやりながら、ルイはウォレスを自分

の馬へ押し上げた。

「では……これで……」

「うむ……」

「カインさん……」

馬に乗りウォレスの体越しに手綱を取りながらルイが言った。

「何かあれば……」

「……？」

「ミルディア軍はあなたに味方しますよ……これはお忘れなく」「……それはどういう……」

さすがのカインもルイの言葉の意味を図りかね、首をかしげた。

「いえ……何も……」

ルイは肩をすくめて笑うと馬腹を蹴つてミルディア軍の陣のほうへ走り去つて行つた。

「レオナ……」

カインは妹を見やつた。

レオナは走り去つていくルイの背中をじっと見つめている。

「なかなかの男だな……ルイ・アルトワ……」

「……ただの異教徒よ……」

小さくつぶやくとレオナはきびすをかえした。

こつしてルイの思惑通り捕虜交換が終了し、ミルディア軍の兵たちは今回の一連のルイの働きに驚愕し、そしてルイを称えた。

惰弱王子と馬鹿にされていたルイは一気に『自分の才覚を隠していた英雄』となつた。

「……」

ルイはいつもの天幕の横の小高い丘に一人でいた。

「坊ちゃん・・・

ウォレスがルイに声をかけた。

「ウォレス・・・！大丈夫かい？」

「鍛え方が違いますからな・・・」このウォレスは、
ウォレスは胸を張つて見せたが、足の傷は深く杖をついて歩いてい
る。

「有難う」じぞいました・・・坊ちゃん・・・

「・・・・・」

「坊ちゃんがその『才覚をひた隠しこそれておられたの』、このウ
ォレスが不覚を取つたために・・・」

ウォレスはうなだれた。

「いいんだ・・・どうせ遅かれ早かれわかつたことだから。キーナ
さんにもキーナさんの第6天魔軍にもばれてたしね・・・」

ルイは肩をすくめて見せた。

「坊ちゃん・・・強いことは悪い」とではないのですよ・・・

ウォレスの言葉にルイはびくりと肩を震わせた。

「まだ覚えております。あの時のこと・・・」

ウォレスは静かに言つた。

「ご幼少の頃から剣の稽古をつけさせていただき、坊ちゃんは10
歳ですでに私から一本取れるくらいの腕前になつておいででしたな・
・・」

「・・・・・」

「そんな時あんなことが・・・」

「ウォレス・・・」

ウォレスの言葉をルイが静かにさえぎつた。

「もう・・・・昔のことだよ・・・」

「いいえ、坊ちゃんが変わったのはあの時からでした・・・そして
それは今も・・・」

ウォレスは悲しげに続けた。

「あなたはシャロン殿を守つた・・・ただそれだけです・・・」

「・・・・・」

ルイは苦しげにうつむいた。

『いやああ！こないで・・・・！』

少女の悲鳴と、手にべつとりとついた返り血の感触がルイの脳裏に鮮明に蘇った。

「僕はただ・・・シャロンを守つたかった・・・」

「守つたのですぞ？ならず者に襲われていたシャロン殿を10歳のあなたが助けた・・・」

「ただ僕はそいつを殺してしまった・・・持つていた剣で・・・」

『シャロン・・・大丈夫かい？』

暴漢の死体から剣を引き抜き歩み寄つたルイを見る少女・・・シャロンの目は恐怖に満ちていた・・・

「シャロンは恐怖でその時の記憶をなくしてしまったんだ・・・」

ルイは寂しげに微笑んだ。

「僕はあの時のシャロンの顔を忘れることができないんだよ、ウオレス・・・」

「しかし・・・」

「確かにあの時僕はシャロンを守つた・・・でも僕はあんな守り方はもうしたくないんだ・・・」

ルイはウォレスに歩み寄り静かに肩を貸した。

「ぼ・・・坊ちゃん・・・」

「いいから・・・陣に戻ろう？」

歩いていくルイとウォレスを物陰でシャロンとキーナが見守っていた。

これらえきれず嗚咽するシャロンの背中をキーナが黙つてなでている。

「私なんて馬鹿だったんだわ。・・・」

「・・・・・」

「ずっとリュに守られていたんだ・・・私はずっと・・・」

「もうええよ・・・」

キーナが静かにシャロンに声をかけた。

「人を守る強さって・・・何も剣だけやないもんな・・・」

「・・・・・」

夕暮れの空にシャロンの嗚咽だけが響いていた・・・

やるべきもの

田の前に累々と横たわる死体の山・・・

すべて忌まわしき存在の異教徒たち・・・

『俺たちにも家族がいたんだ・・・』

死体の一体が目を開けて恨めしげにつぶやく。

『お前たちのせいで俺たちは死んだ・・・』

『俺たちが一体何をした・・・』

次々と死体たちの恨みの声が響く・・・

「・・・・・！」

レオナ・アークスは声にならない悲鳴を上げて飛び起きた。

「・・・・・」

レオナはため息をついた。

ここはもうミルディア軍の天幕ではなく、自軍の天幕。

レオナは寝台から降りるとグラスに水を並々と注ぎ一気に飲み干した。

一体自分がしてきたことはなんだつたのか・・・

武器を振るい、異教徒たちを次々と殺してきた。

その肉を裂く感触、血の臭いまでが生々しく蘇りレオナは呻いた・・・

・

あの男・・・

異教徒の頭目であるルイ・アルトワの田には教皇がいう邪心や穢れなど全くなかった。

いや、自分が殺してきた異教徒たちにもそもそも・・・

レオナは枕元にあるゼメキア教の経典を握り締めた。
ここに書いてある一字一句をすべて暗誦することだってできる・・・
だが自分はこの意味を理解していたのか・・・？

『僕を見てください。あなたと同じ人間です・・・』

ルイの声が脳裏に蘇り、グラスを握るレオナの手に力が入った。

パリン・・・！

鋭い音を立てガラスが手の中で弾けた。

ガラスの破片で切れた手の中から血が滴りおちるのにかまわずレ
オナは宙を見つめていた。

同じ頃・・・

「なぜじゃー!?」

甲高い声が天幕の中に響き渡る。

カイン・アーツは苦々しげに教皇イカロスをみやつた。

「なぜレオナはすぐに出撃せぬ！？」

「落ち着いてください・・・敵の捕虜状態からようやく抜け出した
のです。まだしばし戦場は控えさせるべき・・・」

「ならばそなたが出撃せよ！レオナの失態でわが軍の士気は・・・

「失態？？」

カインの目が鋭くイカロスを見据えた。

「敵の天魔王の一人を討ち、一人を生け捕りにしたことでレオナは
味方の士気を大きく上げました。元はといえば直属軍への兵糧部隊

の一件でわが軍の士氣が下がつたことをお忘れか?」

「・・・・・!」

イカロスのこめかみに青筋が浮き上がる。

「言葉をつつしめ、カインよ・・・我は神の地上の代行者ぞ?」

「・・・・・」

カインの側近たちがイカロスの言葉に身を硬くするのを見てカインはため息をついた。

「わかりました・・・」

カインは静かに立ち上がった。

その全身に満ちる気迫にイカロスは思わずわざかに後ずさった。

「レオナが敗れたことで士気が落ちたのも事実・・・仰せの通り出陣いたしましょう・・・」

カインはじろりとイカロスを見やつた。

「ただし・・・・・」

「ただし・・・・・?」

「貌下にもいづれ出陣願わねばなりますまい? 神の地上の代行者自ら陣頭に立たれればわが軍の士氣も上がらうというもの・・・」

「な・・・・・」

絶句したイカロスを残しカインは天幕を出て行つた。

ゼメキア軍の中で目を引く一隊がある。

全身を黒の甲冑で固めた騎兵隊の一軍・・・カイン・アークス直属のこの部隊は『不死騎団』とも呼ばれ、その名の通り戦場での戦死率の異常なまでの低さから他国にも恐れられている。

今その不死騎団3万に出撃の合図の角笛が響き渡つた。

「兄さん・・・・・」

すでに馬上の人となり、凄まじい英気をみなぎらせたカインにレオナが声をかけた。

「案ずるな・・・お前は出撃しなくてもいい・・・

カインは優しく妹に笑いかけた。

「気づき始めているはずだ・・・お前も」

「え・・・・?」

「この戦の無意味さ・・・・」

カインは遠くミルティア軍の方角を見やりすつと手を細めた。

「早くこの戦で優位に立ち、停戦の交渉をせねばならん・・・この戦いでミルティア軍を壊滅させられるかは五分五分・・・仮に成功したとしても痛手から立ち直るまで5年はかかる・・・・」

「兄さん・・・・」

「お前の迷いは正しい・・・それをわからず同胞を戦死させ続ける教皇は神の代行者などではない・・・」

そう言うとカインは、黒いマントを翻し出撃の合図を下した。

その頃・・・・

ミルティア軍陣営で・・・・

第7天魔王マリアが跪いている。

「いよいよカイン・アークス率いる不死騎団が出撃する模様・・・

「不死の軍団か・・・・」

リチャードがため息と共につぶやいた。

先回の戦闘でレオナ・アークスの直属軍の強さは尋常ではなかつた。だがカイン・アークスの直属兵はそれをも凌ぐ・・・

「思つたより早いですね・・・」

ルイはリチャードを見やつた。

マリアの報告を聞いているのはリチャードとルイだけである。

「迎撃はシャロンの第5天魔軍の長槍部隊がよいな・・・あとカイゼルの第2天魔軍を遊軍として配置し状況に対応する・・・リチャードの言葉にルイが頷く。

「ただ・・・」

「ただ・・・？」

「あの一人を持つてしても・・・やつぱり僕が行かない」とまたゴロアさんのような犠牲が・・・」

「つむ・・・・」

言葉を重ねようとしたリチャードだったが突然俯き、激しく咳き込み始めた。

「父上！？」

「リチャード様！」

駆け寄る二人をリチャードは手で制した。

その手に血がべつとらとついているのを見てルイは絶句した・・・

「そ・・・それは・・・」

「肺の病だそうだ・・・」

リチャードはマリアを見やつて言った。

「マリアの見立てではもう長くは持たんそうだ・・・」

「な・・・・・」

ルイはマリアを振り返った。

マリアが悲しげに赤い瞳を伏せる・・・

「こやつを責めるな？口止めをしたからな・・・」

「どうして・・・・・」

リチャードは息子の言葉に優しく笑った。

「愚か者め・・・出陣前にこのことがわかつたらいかがする？当然に混乱が起こる・・・その状態で国を守れると思うか？」「

「・・・・・・」

「これからはお前が国を守るのだ・・・ルイ・・・皆もお前の力に気がついてある。今のお前であれば皆がついてくるはずだ・・・」

「父上・・・・・」

ルイは苦しげに俯いた。

「まだ・・・迷いがあるんです・・・・」

「誰しも迷いはある・・・それをこの戦いで乗り越えるのだ・・・」

リチャードの言葉にルイは頷くと天幕を出て行つた。

「マリア・・・少し頼みがある・・・」

リチャードは目を閉じ椅子にもたれかかりながらつぶやいた・・・

地を揺るがし迫りくるゼメキア軍力イン・アークス率いる不死騎団の前に第5天魔軍が迎撃体制をとつた。シャロン率いる第5天魔軍の中核は長さ3・5メータルもある長槍部隊である。

「・・・・構え！」

シャロンの号令の元、第5天魔軍が一斉に長槍を持ち上げ槍衾を作り突撃に備える。

騎兵隊相手の第5天魔軍の強さは定評があり、リチャードの布陣は問題ないかのように思われた。

しかしカイン率いる不死騎団が第5天魔軍に50歩の距離まで迫つた時信じられない光景がシャロンの目に飛び込んだ。

不死騎団の騎兵たちが馬を疾駆させながら馬の横腹から取り出し構えたのは短槍だった。彼らは短槍を構えると至近距離から第5天魔軍の前衛目掛けて一斉に投げつけた。

「・・・・！」

これにはたまらず第5天魔軍の前衛の槍兵たちが次々と胸に短槍を突き立てられ、槍衾が一気に崩れたところを不死騎団が襲い掛かつた。

「ち・・・・」

指揮をとるシャロンの周りにまで一気に不死騎団が食い込んできた。襲い掛かってくる兵の、一兵卒とも思えない油断ならない剣技にシャロンは震撼した。

すでに第5天魔軍の不利を見て遊軍の第2天魔軍が不死騎団の横合いから切り込んでいるが状況が一向に好転しない。

— <

シャロンはリチャードの本當を見やつた。口を破られていは一気に本當まで突入されてしまつ・・・！

あせるシャロンの前にカインが馬を躍らせた。

天魔王の一人と見た……悪しか死んでもらひを？」

カインの凄まじい氣迫を前にシャロンの體中に冷たさ汗が流れた。

カインの長剣とシャロンの槍が火花を散らす・・・
10号ほど打ち合いを続いているが誰の目にもシャロンの劣勢が明

二三九

そこでカイセルが駆けこむ。ジョンと共にカインは打ちかかってきたが、カインは余裕を持つて二人を相手にあしらうような素振りすら見せた。

「ぐあ！」

まずカイゼルがカインの剣を受けきれず乗馬から吹き飛ばされた。

左ノセ川！

カイゼルに止めを刺そうとしたカインにシャロンが乗馬ごとぶつかりかろうじて剣先をそらせたが、その結果カインの前に全く無防備となつた。

• • • • ! !

その隙を見逃さず自分の首めがけてカインの斬撃が走るのをシャロ
ンは見た・・・

・・・やられる・・・・！>

死を悟った瞬間シャロンの脳裏に浮かんだのはルイの顔だった・・

次の瞬間・・・

キーン！！

シャロンの首ぎりぎりまで迫っていたカインの剣が音高く跳ね返された。

「来たか・・・」

カインはわずかに口元に笑みを浮かべた。

「ルイ・アルトワ・・・」

カインの前に立ちふさがったルイは静かにカインを見つめている。
「遅くなつてごめん・・・不死騎団のあの攻撃は僕も予測できなか
つた・・・」

そういうとルイはシャロンに微笑みかけた。

「大丈夫・・・僕が守つてあげる・・・君はカイゼルを連れてこ
こから退くんだ・・・」

静かに剣を抜くとルイはリチャードに向き直つた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672w/>

ミルディア国戦記

2011年11月20日08時13分発行